
夢物語

ジェラルド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢物語

【Nコード】

N1436I

【作者名】

ジェラルド

【あらすじ】

青春に、おかしいことは仕方ない。

やる気の無い高校生、東城式は学校へ行く途中、チワワに追われる血だらけの少女、刹那ちまりに出会う。

その出会いにより、式はおかしな怪奇に巻き込まれていく・・・

東城式（前書き）

夢物語

始まりです！

東城式

2009年 10月 2日

朝

「じゃあ、そろそろ行くから」

そう言って家を出た人間。

俺だ。

今家を出て学校へ出発した俺、東城式。

いつものように長い前髪がうねらないように押さえる俺。

最強のくせ毛

昔からこのくせ毛が大嫌いな俺。

家を出るまでは真っ直ぐな前髪は、学校に着く頃にはもう、なんて言うか・・

具茶具茶

毎回悩んでいるのである。

まあ俺の事は置いといて、本題に入ろう。

自転車で学校に行っている俺は、まさか・・まさかこんな事になるなんて

全く思わなかった

そう

人を引いてしまった

な・・・なんてこったああ!!

一瞬だった。

多分、どこ〇もドアよりも一瞬だった。

俺が下を見ると、そこには俺と同じくらいの

血だらけの女の子

ちょ・・・えええ!?

そりゃたしかに引いたよ、うん、それは認める。

でもさ!?

バイクでもなけりゃ車でも無い、普通のチャリだぞ!?
こんなに血が出るなんておかし・・・

・・・は!!

その瞬間、俺の頭には1つの方程式が流れた。

人を引いた⇨死んだ

死んだ⇨殺人

殺人⇨・・・

死刑いい!!!!?!?

血だらけで倒れている女の子の前で、俺は死刑と言うの答えにたり着く。

頭が真っ白になる

彼女を引いたと言う罪悪感が真っ白にさせたのでは無く、自分が死刑になるのではないかと言う心配や不安が、俺のヘッドをホワイトにさせた。

ドウシヨウ マジヤベエ

引いた人の心配よりも自分の事心配してる俺もやばいけどさ。

・・・あれ、待てよ

も、もしかしてコレは、噂のフラグってやつか!?

あの恋愛物でお馴染の・・・

運命的な出会いってやつ

そうだよお!!

絶対そうだぜ!!

きつとこの女の子もすぐに立ち上がって、「ご、ごめんなさいっ!」
とか言って走り去って行ってハンカチ落としてそれを俺が拾って・

あれ、そう言うのって血だらけになってたけ

なってねーよ!!

何考えてんだよ俺!!

明らかにおかしいよこの展開！！

フラグつついかもう別のフラグだよまじ！！

死亡フラグ！？死亡フラグだよねコレ、間違い無いよねえ！？

と、その時

倒れていた女の子が

突然立ち上がった

な・・・なにー！？

「い、生きてた・・・？」

思わず声を出してしまう俺。

女の子の血まみれの顔が、どんどん俺の顔に近づく。

そして

俺の目を見て、こう言った

「助けて！あたし・・・ちわわに食べられちゃう！」

東城式（後書き）

次回　ちまりチワワ　巻1

お楽しみに！

ちまりドッグ 1ノ巻

「あたし・・・チワワに食べられちゃう！」

は・・・はい？

いきなり起き上がった女の子は、突然意味不明な事を言い出した。

血だらけのまま

「ちょ、ちょっと待ってくれ！その・・・体は大丈夫なのか？」

「うん大丈夫！それよりチワワが・・・」

いや、大丈夫じゃないだろ

そんな血だらけでチワワがどーの言われても困るわけで、どうしようもない。

「大丈夫じゃないだろ！そんなに血出して・・・」

「大丈夫！あたし強いからさ！」

眩しい笑顔でピースする彼女

もう・・・なんだコレ・・・

わけ分からん

・ ひん曲がったチャリ、血だらけの元気な少女、俺。なんだこの絵は・

まったく

「それより、あたし今大変なの！助けて？」

確かに大変だ

体中真っ赤なもの。

「い、今救急車呼ぶから！」

俺が携帯を取り出した瞬間

「ちっがーう！！」

吹き飛ぶ俺の携帯

「あ！な、何すんだよ！？」

「もう！違うって言うてるでしょ！？あたしは今、チワワに追われてるの！分かる！？襲われてるの！救急車なんて呼ばないでしょ普通！頭大丈夫！？」

・・・

いや・・・

お前が頭大丈夫？

「待て待て！何を言ってるのかまるで分からん！」

俺はわけが分からなかった。

まさか・

「俺が引いたせいで、頭打ったんじゃない・」

ゴフッ!!

飛んできた拳

彼女のグーは、俺のパーと言う名の顔を思いきり殴った。

「な、なにすんだよっ!？」

「あなたに引かれたわけじゃないわ、あたしは」

・・・え？

いや待て、俺のせいじゃないとするとやっぱり・

本物の身体障害者

俺は携帯を拾い

チャリを直し

猛ダッシュで走り出した!

「な、なんなんだよアイツ! まじ頭やべーって!」

俺はチャリを走らせながら自分の最低さに気づいた

確かに頭おかしいやつがいたら逃げたくなる

だけどやっぱ、血だらけの女の子をほったらかしにして逃げるのは
どうなのか

「ま、まあ大丈夫だよな、別に、俺が引いたわけじゃないみたいだ

し・・・」

「大丈夫じゃないよ！まったく！」

突然聞こえた女の子の声

え・・・？

俺が後ろを見るとそこには

さっきの女の子が
後ろに乗っていた

「な、なに乗ってんだよ！？」

「助けを求めている女の子は、やっぱり助けないと、ね？」

ね？じゃねーよ！

女の子はさっきとは違い、すっかり綺麗な姿に戻っていた

「やっぱり男は頼りになるなあ！ありがとねっ？助けてくれて！」

いや助けたんじゃないくて・・・

お前が勝手に乗ったんだろうがよ！

「なんなんだお前は！？いきなり血だらけで現れ、チワワに食われるだのなんだのって！」

慣れない二人乗りに苦戦しながら言う俺。

「それがあたしもよく分かんないの。家を出たら、いきなりチワワにぶっ飛ばされちゃってさ！もうビックリしちゃったよー！あはは」

・・・

俺は想像した

チワワにぶっ飛ばされる人間の姿を。

チワワと言えば、超小型犬で、超かわいいと言われているあの犬であるわけで、人間に比べると遥かに小さい。

やっぱり、頭おかしいなコイツ

もう聞くのも疲れた

「それで、俺に何をしろと？」

「うーん・・・、とりあえず、今日一緒に帰ろう？」

「え？」

よく見ると彼女は、俺と同じ制服を着ていた。

血で分からなかった。

まあ確かに、こんなにかわいい人と一緒に帰れるのは光栄だが・

「言っておくけど、あたしは頭のおかしい人間じゃないからね？」

自分からそんな事言うなんて、ますます変だ。

「よく分からないけど、一緒に帰ればいいんだな？」

俺がそう聞くと、彼女は嬉しそうな顔をして頷いた。

かわいいなオイ

自分の無視できない下心が、とてつもないほど憎かった。

「あなた名前は？」

「東城式、1年B組。」

「あたしは刹那ちまり！よろしく！」

そう言って微笑んだ彼女の顔は

すげー輝いていた。

あれから6時間授業を受けた俺なのだが・

なんつーか

すげー疲れたんだけど。

掃除の時間に、俺はつくづくそう思った。
よく考えて見ると、馬鹿な話だった。

いきなり現れた女の子をチワワから守る為に一緒に帰る
こんな話・・・

誰に言っても、笑われておしまいだった。

「泣けてくるぜ、まったく・・・」

「なにになに！？ トージョー君、なんかお疲れ気味ですかぁ！？」

突然声をかけてきた

柚野花ニコ

「相変わらず元気だな、お前」

俺にとってのコイツは

柚野花ニコうっさいメス

と言う感じの女だった。

「おう！ ニコは今日も、ニコニコ元気一杯なのだぁ！」

6時間目なのにこのテンション

うぜえ

「お前はいいよな、なんかいつも元気だよ。」

「えーなにになに？ トージョー君今日なんかあったの？」

この質問

今日で何回聞かれた事か

俺がぼーっとしてると、クラスの奴がいちいち聞いてきやがる。そんなに普段、俺は楽しそうに見えるのか!?

「ねーなにになにに!? 教えてよお!」

「うるせーなあ、何も無いってば」

俺の言葉を見無視し、付きまとうニコ。

「ねー!! なになになになになになにに!?!」
答えない俺

「トージョー君はだんだん、ニコに今日何があったのか教えたくなくなる!」

「.....」

「むむむ.....!」

「.....」

しばらくの沈黙

「トージョー君はだんだん.....」

「うるせえー!!」

しつこすぎだろ! いい加減その5円玉をブラブラさせるのはやめろっ!

「何も無いってばよ! ったく!」

立ち去ろうとする俺

その俺のYシャツを掴むニコ

「トージョー君がここから立ち去る為には、今日何があったのか話さなければならぬのであった・・・！」

そう言ったニコの手に握られた、俺の携帯。

こんの野郎

いつのまに・・・！？

「分かった！分かったから返しなさい！早く！それ、パパに返しなさい！」

「わーい！ありがとパパア！」

帰ってきた、俺の携帯

もうさ、まじ

なんなんだよこの親子コント・・・

仕方なく俺は、ニコに話した。

「今日、チワワから女の子を守る為に、一緒に帰るんだよ。」

キョトンとするニコ。

なんかさ、正直

死にたくなってきたよ、うん

自分でも何言ってるのかわかんねーもん、まじで。
駄目だ俺、今日なんか駄目だわ。

前を見ると

やっぱりキョトンとした顔のニコ。

やめてその顔！やめてよ柚野花さん！

「じゃ、じゃあ俺もう行くからさ！」

もう駄目、この空気耐えらんねえ
さらば！

立ち去ろうとする俺

その俺のYシャツを掴むニコ

またかよお！！

もういいよ！これ以上俺を苦しめんな！頼む、頼むよJK！！

「行かないで・・・」

突然のニコの悲しそうな声。

「え？」

「行かないで・・・、東城君が東城君じゃなくなっちゃうよ・・・」

うつ向いたまま喋るニコ

「な、お前、何言ってるの・・・？」

「・・・っ」

俺の質問に答えず、ニコは走り去って行った。

俺が俺でなくなる・・・

「なんなんだ？一体・・・」

今から後を追いつけて、意味を聞く事もできる

でも・・・

俺はなぜか追いつけなかった。

放課後

自転車を動かしながら

門の前で待っていたちまりを見た。

なんとなく、なんとなく

スルーした。

その俺の自転車を掴むちまり

「もう、待ってたんだよ？」

もの凄い笑顔で、俺を見るちまり。

殺意の微笑み

「わ、悪いな、ちょっとカギ探しててさ」

「ふーん。まあいいや、行こ？」

歩き出すちまり。

俺は正直、どうするか迷っていた。
今さらながら。

東城君が東城君でなくなっちゃうよ・・

あの言葉が頭から離れねえ・・

「何してるの？早く早く！」

手招きするちまり

かわいい・・！

ちょっとした下心が、俺を動かした。

「あ、ああ」

俺はちまりの横に並び、歩き出した。

いいのか？これで・

モヤモヤが消えない、俺であった。

それなりに美人なちまりと一緒に帰るだけあって、人目若干気になったが、なんとか会話は弾んでる。

で、結局

ちまりの家の前まで来てしまったわけで。

「それじゃあ東城君は、お父さんと二人暮らしなんだ？」

「あ、ああ、まあな。」

俺は親父と二人暮らしだった。

母親は俺が小さい頃に出てってしまい、姉はとっくに一人暮らしだ。

あれ・

なんでこんな事話してんだ、俺・

「大変なんだね、いろいろ」

「あ？あ、ああ」

なんかすげー素で語ってた気がする・

なんなんだ、この女・

「あ、もう家着いちゃった！早いなあ・・・」

「よかったな、チワワに襲われなくてさ」

しかし、まったく

血だらけで出てきた時は焦ったけど、やっぱりなんもねーじゃねえか。

っーかさ

普通に考えてみたら分かる事だよな

チワワになんかぶっ飛ばされる奴なんて聞いた事ねえし。

なんか俺、すげー馬鹿だ・・・馬鹿だよ俺・・・

「お前さ、やっぱり頭でも打っただけなんじゃないのか？」

「む・・・まだそんな事言うの？」

膨れるちまり

「だっておかしいだろ？ここまで来るのに何も無かったし、そもそもあのチワワなんか・・・」

その時、突然俺を覆う大きな影

俺の上を見て目を丸くするちまり

生臭い匂い

グルルルル・・・

異様な鳴き声

「ん？一体どうした・・・」

後ろ見た瞬間

ブンッ！！

「なっ！？」

勢いよくぶっ飛ばされた俺。

そして

電柱にぶつかった。

「ぐわぁ・・・！？」

何が起こったのかわかんなかった

ただ、とんでもない痛みが、俺を襲った。

そして目を開けると

そこには・・・

家よりも巨大な、1匹のチワワの姿があった。

ちまりドッグ 1ノ巻（後書き）

ちまりチワワ

式とちまりの運命は！？

ちまりドッグ 2ノ巻

痛い・・

勢いよく叩き付けられた俺の体

そして

目の前にいる

巨大なチワワ。

ハッハッ言ってやがる。

「な、なんだ・・コイツは・・っ」

あんなデカイチワワ

正直見た事無い

まさかこれが、ちまりの言っていた・・

「あ・・・あ・・・」

ちまりが震えている

グウウウウ・・ワンワン!!

やばい

あのチワワ、やっぱりちまりを狙ってやがる。

「くそ・・何が・・どうなってんだよ!」

正直、ムチャクチャ怖かった。
そりゃもう、リ〇グを見た後、1人でトイレ行くよりも怖かった。

でも

助けなきゃ

そんな気がした

「刹那!!」

俺はちまりの手を取った。

めっちゃめっちゃ震えてる

きつと俺なんかよりもめちくちゃ怖がってる、手を握った瞬間、分かった。

「走るぞ!」

「え・・・と、東城くん?」

俺とちまりは、猛スピードで走り出した。
こんなに走ったのは何年ぶりだろうか

小6の運動会以来だ

あの時の俺は、すげー輝いてた。

必死になって走って、頑張っていた。

いつからだっけな、学校に興味が無くなったのは。

ワンワンワンッ!!

目を丸くして追い掛けて来るチワワ

必死に逃げる俺たち

まあ当然

逃げきれぬ訳ないか

ガウッ！！

「ぐわっ!?!」

再びぶっ飛ばされる俺。

犬の肉塊がこんなに痛いなんて・・

「東城くんっ!!」

くそ・・痛い・・

返事ができねえ・・

「東城くん! ねえ! しっかりして! 東城くん!」

ちまりの声が聞こえる

駄目だ

声が出ない・・

体が動かねえ・・

「く・・・・・あ・・・・・」

やべえな

やっぱり

一緒に帰るんじゃない、なかったかな。

まさかほんとにこんな化け物がいるなんて
そこそこ楽しい人生だったな。

もう、ちまりの声も聞こえない・・

やべえ

まじこのまま死んじゃうんだ、俺。

考えてみたら、俺はどうしてこうも簡単に

彼女と一緒に来てしまったのか。

ちょっとした俺の下心のせいなのか

ただたんにお人良しなだけなのか

駄目だ、なんかもう分かんねえや。

意識が薄れていく・・

まあいいや・・

せめてちまり

お前だけでも

生きろよ。

「お嬢ちゃんは起きたかい？志乃」

「いや、まだ起きてませんね」

「ふーん、やっぱり起きないみたいだね。」

「ええ、なにしろ巨大でしたからね。」

暗い部屋

男と女、2人がなにやら話込んでいる。

どこだ・・・ここは

目を覚ます俺。

「ここ、どこだ・・・？」

確かチワワに襲われて、逃げて、ぶっ飛ばされて・・・
はっ！

まさかここは

チワワの胃の中

どうりで暗い訳だ。
なんてこった

殺されるだけじゃなく、食われるなんてえ・・・！

「おや、君が先に目が覚めたのかい？」

突然、俺に話かけてきた怪しげな男

「え、あ、いや・・・」おかしい

チワワの胃の中にいるのなら、何故俺以外の人間がいるんだ？

あれ、おかしいよコレ。

「ここは胃の中じゃありませんよ。」

男の隣にいた綺麗な女の人が、俺に言った。

胃の中じゃない・・・？

じゃあここは

「もちろん、天国でもなければ、地獄でもありませんよ？」

ちょっと待ってくれ

「じゃ、じゃあここはどこなんだ！？俺は・・・死んだんじゃないのか？」

「人間案外、丈夫に出来てる物なんだよ。」

生きてる

なんかよく分かんないけど、生きてるよ俺。

別にこの世が好きな訳ではない

ただ、まだ生きてると言うことが嬉しかった。
よし、まあそれは良いとして

で

こいつらは誰だ？

「ところで、ここはどこなんだ？あんた達は一体誰だ？」

いきなりの質問

まあいいだろう。

「ここは忍野屋、まあ言ってみれば、なんでも屋ってところかな。」

「こちらは店長の、忍野キギ様。そして私は副店長の、鎖蛇志乃と申します。」

なんでも屋

おしのキギ

くさりだしの

「なんで俺は、ここにいるんだ？あの時確かに、意識を失ったはず・」

ハッキリ覚えてる

チワワに殴られた、あの痛み。

「ああ、そこにいるお嬢ちゃんが、君を抱えて倒れていたのさ。こ

の店の前でね」

忍野の指差した先には、ボロボロになったちまりの姿

ちまり・・・

そうだ、ちまり!!

「ちまり!!」

ちまりの体は、全身傷だらけだった。

何でこんな事に・・・?

「大丈夫です、今は眠っているだけですから。」

「眠ってる・・・?」

「きっと君を抱えながら逃げてきたんだね、傷付きながらも」

ちまり・・・

くそ

なんか分かんねえけど

すげー悔しいぜ・・・

「しまさか、あんなに巨大なのに襲われるなんて、ついてないね、東城式くん。」

・・・、なに?

「なんで俺の名前を? つーかあんた達、さっき起きた事が分かるの

か・・・？」

「まあ正確に言えば、襲われてたのは東城くんじゃなくて、刹那ちまりちゃんの方なんだけどね。」

そうだ

襲われてたのは悪魔で俺じゃなく、ちまりだ。

もしかしてこいつら、さっきのチワワの事、なんか知ってるんじゃないか・・・

「ま、まさかとは思うけどあんたら、さっきのチワワの事、なんか知ってるのか？」

気になる

あんなチワワを見るのは初めてだからな。

「うーん・・・」

なにやら忍野が考えている。

知らないのか？こいつらも、やっぱり

だけどやっぱり

そんな事はなかった。

「東城くん君は・・・、化け物の存在を信じてるかい？」

化け物

化け物がどんな物なのかと言うと、正直俺もよくわからない。

化け物は化け物である。

「あまり興味なかったかな、化け物とか幽霊とかには。」

小さい頃から親父に言われてたからな。

化け物や妖怪、幽霊なんかは所詮人が作り出した物に過ぎないと。

だから俺は正直、化け物は信じていない。

「その様子だと、どうやら信じていないみたいだね。」

「ああ。でも、なんでそんな事聞くんのだ？」

その瞬間、忍野の目が鋭くなる。

「世の中には数え切れないほどの人間がいる。よね、東城くん？」

「あ、ああ」

「だがしかし、この世の中には人間と同じ数だけ、化け物も存在しているのさ。」

・・・

なに？

何を言い出すのかと思えば、この男・

人の数だけ化け物があるだって？
そんな話を聞いても、ピンときやしない。

「東城くん、正直今君は、化け物なんていない、存在しないと思ってるんだよね？」

「あ、ああ。悪魔で俺の考えだけど」

「確かにこの世には化け物はいない。でも実際は違う。人が生まれれば生まれた数だけ・・・」

化け物も、生まれるのさ

なっ・・・

嘘だろ？

忍野の目を見る限り、嘘をついているようには見えなかった。

「で、でもそんな事言ったら、この世界は化け物だらけのはずだろ？俺は今まで、あんな馬鹿でかいチワワなんて見た事ないぜ？」

「普通の人には見えないのさ。強い呪いの力を持つ化け物・・・、呪念体はね。」

普通の人には見えない、呪念体・・・？
何を言ってるんだ

まじで

「じゃあ、あの時見たチワワは・・・」

「そう、呪念体だよ。しかもかなりの大物のね。」

なんつーか

いきなりいろんな事言われてもよく分かんねえな。

でも、もし忍野の言ってる事が本当なら

あのチワワは本物の化け物だったってことか・・・

「呪いの力を持つ化け物・・・」

「そう。そして彼女・・・、ちまりちゃんは『生種』なのさ。」

いきしゅ？

また新しい単語か。

「生種・・・それは生きる為の何かを持っている者。つまり呪念体は、その生種を得て完全な存在になろうとしているんだよ。」

生きる為の何か？

完全な存在？

「ちょ、ちょっと待ってくれ！その話がもし本当なら、まさかちまりが・・・？」

「そう、紛れもなくちまりちゃんは生種だよ。君達を襲ったチワワは恐らく、ちまりちゃんを得ようとしていた。つまり・・・」

喰らおとしていたのさ。

喰らう・・・

まじかよ・・・

「呪念体は別の言い方をすれば、不完全な存在だからね。生種を喰らって、完全な存在になろうとする。」

「ならちまりは、ちまりはどうなるんだ？」

「このままだと間違いなく、食い殺されるだろうね。」

そりゃもう

頭からガブリとね

「いずれここにいるのもバレる。どうする？東城くん」

ちまりが生種で

さっきのチワワが、ちまりを喰おうとしてる

逃げるしかねえ。

「に、逃げなきゃ駄目だろ」

俺は急いでちまりを起こす。

でも

何度揺すってもちまりは

起きなかった。

起きるどころか

ピクリもしない。

「無駄だよ、ちまりちゃんは目を覚まさない。」

え？

目を覚まさないだって？

「呪念体は、人のありとあらゆるモノを盗む事ができる。どうゆう事か分かるかい？」

え、つまりそれは・

・
・
・
・

よく分からない

「ちまりちゃんはあのチワワに、『目を覚ますと言う事』を盗まれたのさ。」

待ってくれ

よく分からない

「そ、そんな事が！大体そんなのいつ盗まれたんだ？」

「現にちまりちゃんは、もう長い間目を覚ましてないしね。恐らく、

この時に盗まれたのさ」

忍野の手が、ちまりの首を掴み持ち上げた。

よく見るとちまりの背中には、無数の噛み後が付いていた。

まさか・・

あの時、俺の前に血だらけで現れたのは・・

チワワに襲われてたからか

「生種は特別な力を持つ人間さ。普通の人だったらとっくに死んでいただろうね。」

もし、忍野の言っている事が本当なら

「もうちまりは二度と、目を覚まさないのか？」

「まず間違いないね。」

そんな

何とかならないのか・・

「まあ、助ける方法はあるよ東城くん。」

「な、本当か!？」

「盗まれてた物は、盗み返せばいいのさ。単純な話だ。」

え

何言ってんだよコイツ

確かに忍野の言う通り、盗み返せばそれで終わる。でも俺は化け物でもなければ呪念体でもない。

あんな化け物からどうやって盗めって言うんだ。

「まだ気づかないのかい？ 東城くん。なぜ君にも、呪念体が見えたのか」

そう言えばそうだ

呪念体は普通の人間には見えない物。
なんで俺は・・・

まさか・・・

「そうさ東城くん。君も立派な、呪念体だからだよ」

そう言って俺を見る忍野の目は、とても不気味だった。

「お、俺が呪念体だって・・・？」

そんなはず無い・・・

だって俺は今までだって、普通に・・・

「どうやら君は、特別な呪念体のようだ。普通の人にも見える、特別な化け物さ。」

化け、物

なんだこの気持ち

なんかすげー傷付いた。

「俺が、化け物・・・？本当なのか？」

「本当さ。ね、志乃？」

「はい。普通の人でしたら、あのような呪念体は、見えませんから。」

なんだか志乃さんに言われると

まじで疑えねえ。

「自分でも気づかなかった・・・、本当に俺が、呪念体・・・」

普通の人間ではない

認めたくなかった。

認めたくなかったんだ

でも、どうやら本当らしい。

「君が呪念体ならつまり、君もあのチワワみたいに、『物』を盗めばいい。簡単な話だろう？」

無理だ

あんな巨大な化け物から盗むなんて

「俺はあのチワワに、軽々しくやられちゃったんだぞ！？今行っただけだ！」

自分が人間じゃないと言う事だけで今は頭が一杯なのに
あんな化け物から盗めだと？
ふざけるな。

「じゃあ君はこのまま、ちまりちゃんを置いて一人で逃げるのかい
？」

一人で
逃げる？

「そ、それは・・・」

返す言葉が見つからなかった。
俺のちまりは出会ったばっか
他人に等しい。

そうさ

狙われてるのは俺じゃない、ちまりなんだ。
そうさ、一人で逃げればいい
わざわざ怖い思いなんて
する必要ないんだ

他人の為にそこまで
する必要はない。

俺には

俺なんかには

ちまりは助けられない。

「俺には・・・無理だ」

ちまりに背を向ける俺

すげーかっこ悪い

「逃げるんだね？」

「・・・・、ああ」

「分かった。君がそう言うなら、止めはしない。でも東城くん、ちまりちゃんは誰に、助けを求めたんだい？」

何？

ちまりは俺に

俺に助けを求めてきた。

「そう、他の誰でもない。東城くん、君に助けを求めたのさ。」

「俺に・・・」

「そして、君をここまで抱えて来たのは、一体誰なんだい？」

忍野の顔が近付く。

ちまりだ・・・

意識を失った俺を、ここまで抱えて来てくれた。

そうでなければきっと、俺はとっくに死んでたかもしれない。

ちまりは

俺を助けてくれた。

「君は、ちまりちゃんに助けられた。なのに君は何もせず、一人で逃げると言うのかい？」

ここで俺が逃げたら、きっとちまりは今度こそ喰い殺される。

でも

俺が助ければ

少しは変えられるかもしれねえ。

馬鹿らしいと思ってくれてもいい

でも

それでも俺は

ちまりを助きたい。

「どうすればいい？ 教えてくれ、忍野！」

「迷いは無いみたいだね、よし、志乃。」

「はい。」

志乃さんが俺に近付いてくる。

「では、失礼しますね。」

一体何を

「痛っ!？」

な、なんだこの痛み・・・
噛まれてる？

鏡を見ると、志乃さんが俺の首に噛みついていた。

「な、何を・・・」

「大丈夫、少し痛いだけさ。」

そう言うのは先に言ってくれ

「志乃に血を吸われた者は、一時的だけど力が高まる。つまり東城くん、君の呪念体としての力を高める事が出来るんだ。」

「そ、そうなのか？」

忍野といい志乃さんといい

一体何者なんだ？

「ふう・・・、ご馳走様でした。」

志乃さん

何か満足そうだな。

「東城くん、今の君ならあの巨大なチワワにも対抗できるはずさ。」

「何か実感ないけど、大丈夫なんだな？」

「ああ、間違いないよ。」

俺はちまりを見た

眠っているのか死んでいるのか
よく分からない

正直、めっちゃめっちゃ怖い
正直、行きたくない

でも

「行くしかない・・・！」

俺は走り出した。

チワワをやっつけに。

ちまりドッグ 2ノ巻（後書き）

次回、ちまりチワワ完結！

ちまりドッグ 3ノ巻

店を出た俺

しばらく歩いた先には
予想通り

あの巨大なチワワが目を丸くして立ち尽くしていた。

目が合う俺とチワワ
かわいい目してやがる
やっぱりチワワだ。

グルルルルルル・・

肩の力を抜いて、集中・・

ワンワン!!

来る・・!

猛スピードで突っ込んでくるチワワ

めっちゃめっちゃ怖いんですけど

でも

やるしかねえ。

チワワのストレートパンチ

それかわす俺

あれ？なんか体が軽いぞ

これなら

イケる！

「この・・喰らえ!!」

俺流回し蹴りが炸裂。

キャン!!

よし、当たったぜ

このまま一気に・・

その瞬間、チワワのしっぽが俺をぶっ飛ばす。

「なっ!？」

勢い良くぶっ飛ばされる俺

何回目だチクショー!

「くそ・・力が強くなって言ってもやっぱり痛いのか」

と、休む間も無く

チワワが俺に襲いかかる。

その姿はまさに

ケルベロス！！

「俺は一体何と戦ってんだよ、くそ！」

周りから見たら馬鹿な光景である。

チワワは他の奴には見えない

つまり俺が一人芝居をしているように見えているのだ。

幸い、周りに人はいないのだが

ガウッガウッ！

再び、チワワのパンチが俺に放たれる。

それを避ける俺

それを先読みして、しっぽを振り回したチワワ。

そのしっぽにぶっ飛ばされる俺

嘘おー！？

なに頭使ってんの！？

たかが小型犬のくせに。

「く、くそ！まだまだ！」

そう

俺は殺られるわけにはいかねえんだ
ちまりの為にも。

だがやっぱり相手は犬

ここまでは互角だったものの
人間が犬の速さについていけない訳もなく

「ぐはっ・・・！」

ボコボコにされた俺

やっぱり駄目だ

俺の力がどんな強くても

コイツの速さにはついていけない・・・

まあ普通ならもう死んでるが

ガウッ！！

チワワが口を開けた

そのまま倒れ込む俺の元へ走ってくる。

ほくらポチ、おいでー！

ワンワンッ

などと言う暖かいもんじゃない

まさに今俺は、食われようとしている

あのかわいいはずのチワワに

体が動かねえ

くそ、動けよ

動けってんだよ！

「ふざ・・・けんな・・・」

どンドン近付くチワワの口

「まだ・・・まだ・・・」

生臭い犬の口の臭い

「俺はまだ・・・」

喉ちんこが見えた

「まだ・・・」

ちまりのアドレスも聞いてねえんだー！！

ギャウウウ！？

全ての力を一気にぶつけた

そんな感じのパンチだった。

俺のパンチは見事チワワに命中
悲鳴を挙げて倒れるチワワ

「へっ・・・ざまあ・・・みろ！」

久しぶりだな
こんなに

汗をかいたのは

「返してもらうぜ・・・」

ちまりの物をな！

待ってろよちまり

今行くからな

「ん・・・？」

「どうしました？キギ様」

「邪気が消えた・・・」

キギの言葉と共に
ちまりが目を覚ました。

「あれ・・・ここは・・・」

「やったんだね、東城くん」

キギが見た先には、ボロボロになった式が倒れていた。

「キギ様・・・」

「ああ、本当に面白い奴だよ、東城式くん」

まったく

なんでこんな頑張ったかな、俺

体中痛いぜ。

ちまりは大丈夫かな

て、なんでこんな時まで心配してんだかな

ほんと、自分が訳分かんねえや

でもまあ

悪くは無かったな、うん。

大丈夫かな、ちまり・・

目が覚めた頃に

俺の目に見覚えのある所が見えた。

「ここは・・」

「あ！目が覚めた、東城くん！？」

ん

この声、ちまりか・・

ちまり！？

「お前、もう大丈夫なのか！？」

「うん、あたしは大丈夫だよ。」

良かった

すげー良かった

なんか

すげー嬉しかった。

「あれ、どうしたの？笑ったりして」

「べ、別に笑ってないって」

思わずニヤけてしまう。

よく見渡すと

ここはちまりの家の前だ
どおりで。

「全部聞いたよ、忍野さんから」

「忍野から？」

「うん、さっきのチワワの事も、東城くんがあたしの為に頑張ってくれたことも。」

う・・

なんかすげー恥ずかしいんだけど

「そして、東城くんの事も・・・」

「俺の事も？」

ああ

俺が呪念体だって事か。

やっぱ怖いよな

化け物だもんな。

「あたし、気にしないよ」

「え？」

「あたしは東城くんが何だろうと、気にしない。何であろうと、東城くんは東城くんだからさ!」

・・・まったく

やっぱ頭おかしいぜ

ちまり

「俺は呪念体で、お前は生種だぜ?ほんとに怖くないのかよ?」

「まあちよつと怖いけどさ」

怖いのかよ!!

そこは普通『大丈夫だよ』とか言うもんじゃねえのか!?

「東城くんは、あたしを助けてくれたもん」

「え?」

「ちゃんと助けてくれた。その事に変わりはないよね?」

そうだ

俺は他の誰でもない、ちまりの為に頑張った

その事に嘘はない。

「だからあたしは、東城くんを信じたいと思います!」

なんつーかまあ

これが青春てもんなのか
俺はそう感じた。

「あ、ありがとう」

「うん！」

ちまりは笑ってた。

正直半端ないくらい

かわいい

眩しすぎて直視できねえ

「つーかお前、なんであんなチワワに襲われてんだよ。どうせ襲われるならもっと簡単なのに襲われろよな！」

「うーん、わかんない！犬好きだからかな？特にチワワ」

なんで犬なんだよ

どうせならもっとこう、倒しやすい物にして欲しかったぜ。

蟹とかさ

「良かった！東城くん」

「な、なんだよ急に」

「助けを求めたのが東城くんじゃなかったら、きっとあたし、食べられちゃってたと思うんだ」

ちょ

なに嬉しい事言ってくれてんの！

「だからこれからもよろしくね！東城くん！」

「あ、ああ！」

よろしく・・・、か
て・・・

え？

「ちょ、ちょっと待ってくれ！それはつまり、またさっきみたいな
化け物が出た時には、よろしくって事なのか？」

「うん！そうだよ、どうしたの？」

いや

まあなんて言うか

これから友達から始めましよう的な感じなのかと。

青春て

やっぱくだらねー！！

いろんな意味で疲れたぜ

まったく・・・

昨日はいろんな事があった

ちまりと出会ってチワワに追い掛けられて

忍野や志乃さんとも出会い、俺の事も聞いた。

俺が呪念体・・

正直今でも、あんま実感がない。

忍野が言うには、俺は普通の人間にも見える特別な呪念体だと言うらしい。

忍野キギに、鎖蛇志乃・・

一体何者なんだ、あいつら

化け物の存在を知った。

自分が化け物だと言う事も知った。

そして、刹那ちまりに出会った。

これから俺には、一体何が待っているのか

できれば何も、待ってて欲しくない。

それでも何故か少しだけ

楽しいと感じている

自分がいたんだ。

刹那ちまり

刹那ちまり

俺と同じ高校の、同じ学年の女。
女なのだ。

元々あの日の朝出会うまでは、ちまりの存在は知らなかった
違うクラスだし
知る必要は無かった。

昔からよく変な物が見えたりして、奇怪な事には多少慣れていると
言ってもいいのだが

さすがにあんな巨大なチワワは見た事がなかった。

ちまりとの出会いも、その奇怪な出来事なのか

まあ

さすがに自分が化け物だったと言う事は、かなり驚いた。

その真実を俺に教えた

忍野キギ

鎖蛇志乃

こいつらとの出会いは間違いなく、奇怪だ。

で

今日も普通に登校してる俺なんだが・

「もお！遅いよ東城くん！遅刻っちゃうじゃん！」
なんでお前がいんだよ

そりゃ確かにあの時、よろしく的な事は言われたけどさ・

ちまりはクラスでもそこそこ人気者で、少し茶色めの長い髪、そして明るい性格の奴らしい

そんな人気者と一緒に登校してるなんて・

こんな現状・

疑われちまうって！！

さっきから周りの奴らの目が痛い

俺なんかが人気者と登校してるなんて

そりゃ変だわよ。

「く、くそ・・・、なんでこんな事に」

駄目だ

耐えらんねえ

自転車を走らせちまりを抜く俺。

「ああー！東城くん待ってよー！」

頼むからそんな大声で俺の名を呼ばないでくれ！

嫌なわけじゃない

むしろ少し嬉しいかもしれない。

でも

めっちゃめっちゃ恥ずかしいからっ！！

とにかく、急いで誤解を解かなければ

高校生の噂は怖いからな

さらにスピードアップする俺。

と

その時

前に小柄な女の子

ちょ、危ねえ！

ギリギリセーフで女の子を交す俺。

「セ、セーフ・・・」

危ない危ない・・・

危うくぶつかる所だったぜ

よく見るとその女の子は、俺と同じ高校の制服を着ている。

髪を上めに2つ結びしてる

あれ、こいつ同じクラスの
確か・・

えーつと・・

名前が出てこない

「・・・・・っ」

何か言いたそうに、俺を見る女の子。

「あ、ああ、悪い」

思わずすぐに謝る俺。

「・・・・別にな、大丈夫」

そう言っで、さっさと立ち去っていった。

「な、なんだ？ あいつ」

彼女の後ろ姿は、なんだか

すごい、寂しい感じだった。

もしかするとその時は気付いていたのかもしれない

彼女の事を。

刹那ちまり（後書き）

次回、すずみスイカードア
スタート！

すずみシカード 1ノ巻(前書き)

だいぶ遅くなりました(泣)
申し訳ありません！

すずみシカード 1ノ巻

月曜日

俺は周りの痛い視線をくぐり抜け、見事に教室と言う名のゴールにたどり着いたのであった。

くそ

今度からちまりには気を付けないといけないぜ・・・！

あんな痛い視線はもう嫌だ。

まるで美女と野獣が一緒にいるみたいに驚いたように見やがって

「ふう・・・」

一息ついて教室を見渡す俺

すると窓側の席に、登校中に会った奴がいた。

今日、俺はあの日のようにまた

人を引いてしまうところだった。

今日のはまじで危なかったぜ・・・

いやまじで。

しかも、あんな体弱そうな奴を。

そんな小柄な彼女は、たくさんのクラスメイトの誰とも話さずに本を読んでいた。

まあ、なんつーか

いるよなこう言う奴。

クラスに一人はいると思うよ、うん

「……」

なんとなく、なんとなく彼女をずっと見ている俺。

そうしたらいつのまにか

朝のHRが始まっていた。

時間が起つのは早いぜ

「えー、今日はいつも通り……」

長々と続く、教師の話。

こうゆう話は大体、誰もちゃんと聞いてないものである。

もちろん俺も、聞いていない。

クラスメイトの顔を見渡してみても、平気な顔で携帯をいじったり、本を読んだり・・・

教師には同情するよ、まったく。

「東城、おい東城！」

突然、隣から小声で俺を呼ぶ男。
クラスメイトの一人、獅子渡彰^{ししわたりあきら}

実は俺が入学して、初めて話した奴

まあ、たいして存在感の無い普通の奴である。

ただしかし・・・

「俺さあ、やっぱ思うんだよ・・・。小さい女ってかわいいってさあ
！」

始まった・・・

獅子渡は小さい女好き、世間で言うロリコンなのだ。

いつもいつも幼女の話だのなんだのって話してきやがって・・・

「なんだよ、またかわいいロリっ娘でも見つけたのか？」

「それがさあ！C組にめっちゃめっちゃかわいい奴がいてさあ！」

目を輝かせて話す獅子渡

「へえ、そりゃ、良かったな」

適当に流す俺

毎回毎回こいつのロリ話を聞かされてると、いい加減嫌になつてくるぜまったく・・・

「まったくよお！このクラスにはロリがいなすぎんだよ！」

「だから他の組で見付けるしかないってか？」

「そうなんだよー！お前も分かるだろ？な？な？」

な？じゃねーよ。

俺までロリコンだと思われちまう。

朝から元気な奴だぜ、ほんと。

ロリ、か・・・

その時たまたま目に入ったのが、朝事故りそうになったアイツだった。

「なあ獅子渡、アイツもロリなんじゃないか？小さいし」

そいつを指さして言った
なんとなく。

「あー、なんだっけアイツ、確か・・・花園鈴弥だっけ？」

はなそのすずみ
花園鈴弥

そうか、そんな名前だったな。
今聞いて思い出したぜ。

「お前さあ、全然分かってねえよな」

なに？

「そうか？あいつも充分小さいと思うけど？」

俺がそう言うのと、獅子渡は呆れ顔でため息をつく。

なんかすげームカつくんですけど

「花園鈴弥はアレだろ？なんつーか・・・ロリって感じじゃねえだろ？」

なんじゃそりゃ！

「分けてわかんねーぞ」

「だからさあ、なんて言うか、無口系じゃん？おしとやか系じゃん？だからさあ、なんかロリって感じしないんだよな」

こいつの思考はよく分かんないな

無口系とか・・・

まあ確かに言われてみると、花園鈴弥が教室で話をしてる所なんて見た事ない。

休み時間も、ずっと本を読んてる

誰とも話さずに。

「ああ言う不思議ちゃんは、ほっとくのが一番いいぜっ」

まるで興味無しって感じだな

「ほっとくねえ・・・」

そう言っって花園を見る俺。

「さすがに先生の話はちゃんと聞いてんだな・・・。」

花園の目は先生に向いていた。

本を持ったまま

そんなこんなしてる間に、すっかり休み時間になっていた。

いつも通りぐちゃぐちゃになっている俺の

前髪

「くそ、鏡無いとよく分かんねー!」

急いでトイレに向かう俺。

廊下に出ると

なんか

すごい寒かった。

そして

「トージョー君!」

俺を呼ぶ声

ニコだった。

なんだろう・・何か

気まずい。

すごい気まずいよ・・。

「よ、よお。」

「おはよう！今日も相変わらず前髪すごいね？」

あ、あれ・・

俺とは違い、ニコはまったく普段通りだった。

忘れたのか？

ちまりに出会ったあの日

俺と柚乃花ニコは、ちょっと気まずい関係になってしまったのである。

もつとも、ニコの方は忘れてるみたいだけど・・

「トージョー君もそろそろストパーかければー？真っ直ぐになるよ、ほら、ほら」

ちくしょう・・

ニコの髪はいつも真っ直ぐサラサラで、正直羨ましかった。

「金が無いんだよ！しょうがねーんだ！」

「でもストパーかけると傷むし、止めた方がいいよ！」

どっちだよ

まったくコイツは・・

人の気持ちも知らないでニコニコと。

「あのさ・・トージョー君？」

急に表情が変わるニコ

あの時と同じだ。

なんだ？

今度は何を言ってくる？

「この間はごめんね？アタシ、ちょっとどうかしてたみたい。」

「え・・・・？」

どうやらニコは

覚えてたらしい。

あの時の事を

「それが言いたかったんだ！うん、それだけ！」

ニコがあの時俺に言った言葉

俺が俺でなくなってしまう

「じゃあ、また後でね！」

「ま、待って・・・」

俺が引き止める間もなく、ニコは行ってしまった。

あの時の言葉は一体、何だったんだろう・・・

俺はあの時と同じように、去って行くニコの背中を見つめていた。

それからしばらく長い時間が経ち

気が付けば放課後になっていた。

今日はいろいろと考えちゃって、授業なんて全然聞いてないな・・・

「まあいいや、帰るか・・・」

鞆を持ち立ち上がる俺。

その時

「とっ・・・？」

何かが俺にぶつかってきた

花園だった。

今のは明らかにわざとだ

「な、なんだ？」

「・・・・・・」

花園は俺を軽く見た後、さっさと帰ってしまった。

おい

なんなんだ！？

復讐か？朝の復讐なのか？

ほんと、よく分からねえ奴。

俺はいつも通り自転車で校門まで行くと
そこには・・

「東城くん！」

ちまりの姿がある。

しかも、大きな声で俺を呼んでやがる！

「シャラアアップ！！」

朝あんな事があったのにも関わらず、この女は・・・

「どうしたの？ 東城くん、そんな焦って」

「お前なあ！ 疑われるだろーがよ！ 少しは気にしろ！」

「??????」

くそ

頼むからそんな本気で分かんないみたいな顔しないでくれ・・・

「と、とにかく！ 何で校門にいんだよ？」

「そんなの、東城くんを待っていたに決まってるじゃん！」

なんつー事だ・・・

そりゃまあ、嬉しいって言えば嬉しいけど。

「何で待ってるんだ！？ お前はもう何にも狙われてないだろ？」

「東城くんはあたしに言いました。」

はい？

「あたしを守ってくれと！」

ま、眩しい笑顔を見せるな！

正格に言えば、半強制的である。

決して俺が言ったわけじゃねえ！

「だ、大丈夫だろ？別に・・・」

「東城くんは言いましたー！！あたしを・・・」

待て待て待て待て待て！！

頼むから大きな声でそれを言うな！

「分かったよ！帰ればいいんだろ！帰れば！」

「よろしい！じゃあ、今日も家までよろしく！」

何てこった・・・

こんな事が毎日続くのか・・・

疑われるよコレ

間違いねえよ！

「よし、じゃあ行こっか！」

くそ・・・

周りの視線が痛くなってきた

朝と一緒にだ。

何とかして疑われずに済む方法を考えなければ・

あ・・・

そうだ！！

距離をとって歩けばいいんだ！

「・・・・・・・・む？」

ちまりと10メートル程距離をとって歩く俺。

それに気付いたちまり。

「東城くん？」

「ん？な、何だ？」

「・・・・・・・・ぐすっ」

え？

急に泣き出したちまり。

「お、おい！なに泣いてんだよ？」

「東城くんは・・・ヒック・・・あたしがそんなに・・・ぐすっ・・・嫌なんだ・・・？」

嫌なわけじゃない！

ただ、今までこんな経験があまり無かった俺には、少しキツイだけなんだが・・・

「べ、別に嫌なわけじゃねえよ！」

「だったらもっとくっついてよお・・・！」

ちまりって

こんなキャラだったっけ？

「わ、分かったよ・・・」

「やったあ！」

俺が距離を戻した途端に笑顔になるちまり。

そりゃそうだろう

嘘泣きだったんだからな・・・

そんなこんなで、結局俺とちまりは今日も一緒に帰り、漫才のような会話を繰り返していた。

「ねえ、東城くん？」

急にくっついてくるちまり

「な、何だよ？」

「ドキドキしてる・・・？」

な・・・

こいつ、何考えてやがる

「こうやって見るとあたし達、恋人みたいだね？」

「あ、ああ、そうだな・・・」

流せ・・・

流すんだ俺！！

今は流すしか無いぞ・・・

「このままあたし達・・・」

唾を飲む俺

「恋人になってしまおうか？」

な、何だ

何なんだあああ！！

まずいぞ、この状況・・・

このままじゃまずい！

一体どうしてしまったんだ！？

まずい、心臓がバクバクしてやがる・・

「東城くん、大丈夫？」

「え？あ、ああ、大丈夫に決まってんじゃない！」

「ぷっ・・・」

ん？

「あははははっ！面白いね！東城くんて！」

な、何だと？

「どお？結構良かったでしょ？あたしの演技！」

engi・・・？

演技だと！？

「なっ・・、お前、演技だったのかよ！」

「いやあ、東城くんがすごい顔で緊張してたから面白くてついね」

この女あ・・

疲れる！！

「あっはははは！あ、ほら！気が付けばもうあたしの家に！」

笑い事じゃねえぞ！まったく・・

時間が経つのは本当に早いもので
いつのまにかちまり家に着いていた。

「ありがとね？東城くん、ほんと楽しかった！」

笑顔で言うちまり。

まったく・・・、今のでかなり疲れちまったよ。

「頼むから、俺の寿命を縮めないでくれ！」

「ごめんごめん！じゃあ、また明日ね？」

「ああ、また明日・・・って」

また明日？

明日もまさか、一緒に帰るのか？

「ちょ、ちょっと待っ・・・」

時すでに遅し。

まじかよ・・・

明日もかよ・・・

嬉しいんだか、悲しいんだか。

「仕方ねえ、帰るか。」

「あーいたいた。おーい！東の城くーん！」

突然響き渡る、俺を呼ぶ声
この声は・・・まさか・・・

「ひーがーしーのーしーろーくーん！」

聞き覚えのある、男の声

「ひーがーしーのー・・・」

「東城だー！！」

忍野だった。

忍野キギ

「おお、東城くん、やっと気付いてくれたか。」

「変な名前で俺を呼ぶな！忍野！」

「いやあ悪い悪い、僕は人にあだ名を付けるのが大好きでね」

「あだ名でも何でもねーよ！そのままだろーが！」

まったくこのオッサンは・・・

相変わらず怪しいオーラ出しやがって。

「そんな事より、探したよ東城くん。ここにいれば来ると思ったけど、ビンゴだったね？」

ここにいれば来ると思った

「ちょっと待て、まさか、見たのか？」

「いやあ、僕は何にも見てないよ、顔を真っ赤にしてる東城くん何て見たくもないよ。」

見てますね

このオッサン、普通にさっきの会話見てやがった・・・！

「わ、忘れてくれ！全部忘れろお！」

「おお！元気だね東城くん！じゃあその勢いで、僕の頼みも聞いてくれないかな？」

・・・なに？

頼みだと？

正直忍野の頼み何て、怪しすぎて仕方ない。

「な、何だよ頼みって」

「実はまだ、処分しきれてない死体がたくさんあってね。志乃は今いないし、僕ひとりじゃキリがないからさ。」

なにを言ってるんだ

このオッサン。

「さーて、帰るか。」

立ち去ろうとする俺。

それを引き止める忍野。

「何だよ！？なんで止めんだよ！」

「いいじゃないか、僕と君の仲だろう？死体の処分くらい、すぐ終わるって」

おかしいって！！

「おかしいだろ！死体の処分とかお前・・・、何してんだよ！大体すぐ終わるならお前ひとりでやれ！」

「いいじゃないか東城くん、僕と君の仲だろう？」

「何で俺とお前の仲を強調するんだ！離せ！」

そりゃあ、忍野にはずいぶん世話にはなった

それは事実だ。

でも

死体処分なんて気味悪くてやってられるか！

「いいのかい？東城くん」

「な、なに？」

忍野の目が光る。

そして、一枚の紙切れを取り出した忍野。

そこには・・

長々と書いてあるアドレス。

「これが何だか分かるかい？ 東城くん」

「な、何だよ。ただのアドレスだろ？」

「ただのアドレスじゃいよコレは。ちまりちゃんの、アドレスだよ」
なっ・・

「何でお前がちまりのアドレスを・・」

「いいだろう？ 知りたいだろう？ 知りたいよねえ」

正直

知りたい。

うん。

知ってええ！！

「手伝ってくれたらコレ、東城くんにあげちゃうよ？コレ」

こいつ・・・

賢いやつめ・・・

「わ、分かったよ！やればいいんだろやれば！」

情けねえよ俺・・・

本当。

「決まりだね。それじゃ、早いところ済ましてしまおう」

そう言って歩き出した忍野。

それに着いていく俺。

なんつーか・・・

すっげえ恥ずかしい一時だった。

「うわっ・・・臭・・・！」

「大丈夫かい東城くん？処分が終わるまで息は止めておいた方がいいよ。」

そんな止めたら死ぬわ！

まったく・・・

結局手伝う事になったわけなんだが

目の前に広がる、腐った死体の山。

人間の死体もあれば、蟹の死体、蝸牛の死体、猿の死体、蛇の死体、猫の死体など、様々な動物の死体が転がっている。

「どうしてこんな腐るまで処分しなかったんだ？」

「いやあ、僕も忙しいんだよ。いろいろ」

「忙しくたってお前……。そもそも何で死体の処分なんかやってんだよ？」

誰もが気になるであろう事だ。

「言っただろう？ここはなんでも屋みたいなものだ。死体の処分だろうが、人殺しだろうが、盗みだろうが、何だったってするさ。」

ろくな仕事してないな・・・

「元々ここには知り合いが住んでただけど、いつの間にか居なくなってしまうってね。それで、今はなんでも屋をやってるってわけだよ。」

よく分かんないな

「知り合いって、友達か何かか？」

「忍野メメ、それと、忍野忍って子もいたかな。友達・・・まあそんな感じかな。」

「忍野って、お前と家族か何かじゃないのか？」

死体を大きな袋に詰めながら、俺は聞いた。

「家族か・・・そんな良いもんじゃないよ、別に。たいした事ない、ただの友達さ。」

俺が渡した袋を燃やす忍野。

「その人達は今どうしてるのか、本当に分かんないのか？」

「分かんないかな。まあ、おそらくは化種に殺されたか何かだろうけどね。」

化種に殺された・・・？

「何なんだ？その、カシュって言うのは」

「化種・・・まあ、今で言う呪念体みたいなものだよ。どうって事ない、化け物さ。」

呪念体・・・

「それって、俺と同じ呪念体に殺されたって事か？」

「君みたいな良い呪念体なんかじゃない、もっと恐ろしい・・・特別な力を持った呪念体に殺されただろうね。」

忍野の表情が段々、寂しげになっているのか分かった。

「だ、大丈夫だって！呪念体は『者の物』を盗むんだろ？殺されたりなんかしないって」

オッサンを慰める俺。

何か変な感じだな・・

「ありがとう東城くん。でも、呪念体をあまり甘く見てはいけないよ？」

忍野が不気味に微笑み、俺の目を見て言った。

な、何だ？

「この世にはただの呪念体とは違って、とても危険な力を持つ特別な呪念体も存在するんだ。分かるかい？」

「じゅ、呪念体は呪念体なんじゃないのかよ？」

またよく分からん事を・・

「盗むだけじゃない。人を見ただけで殺してしまう呪念体だって、この世にはいるんだよ。」

見ただけで、人を殺すだと・・？

「東城くん、なぜ今僕が、こんな話をしてるか分かるかい？」

たしかに・・

忍野の目は、完全にマジだ

「ど、どうかしたのか？」

「臭うんだよ東城くん。君からすごい臭うんだよ。」

「に、臭う？」

「蟬臭いよ東城くん。まさかとは思うけど、今日、呪念体は見えないよね？」

セミ臭いだと？

「いや、見てないぞ。大体もう冬だぞ！？蟬なんているわけ・・」

「いや、この臭いは間違いない。東城くん、今日の事、詳しく聞かせてくれないかい？」

忍野は途端に真面目になって、俺の目を真っ直ぐ見てきた。

何だよ・・

一体何だってんだ！？

すずみシカード 2ノ巻

「今日の君は凄い蟬臭いんだよ、東城くん。」

忍野の思いがけない発言に、俺は驚きを隠せなかった。

いや、せみ臭いってお前・・・普通に臭いならまだしも、せみ臭いってお前・・・

「それは俺に対する、新種のいやがらせか？」

「嫌だなあ、いやがらせなんて僕がすると思うかい？」

すると思えない俺は、凄く困った。

「いやあ、改めてじっくりかぐと、本当に臭いね東城くん！有り得ないぐらい臭いよ東城くん！夏を思い出す臭いだよ東城くん！」

・・・。

とりあえず・・・

俺は死ねば良いんでしょうか？

「まあ冗談はさておき、何かあったのかい？」

「あのなあ・・・、せみ臭いなんて聞いた事ねえぞ。それに、今日は別に何も・・・」

「おかしいなあ、何もないのにこんな臭い訳ないよ東城くん。まさ

か君って・・・」

これから忍野が言う事を予想できた俺。

「俺はせみじゃない、人間だ。」

「じゃあ・・・」

「食べもしない！どんな生命体だよ俺は！？」

「何だよ東城くん、まだ何も言っていないじゃないか」

何だよその顔

「お前の言いたい事なんて、大体予想つくんだよ！」

「何だ東城くん、この短期間でずいぶんつまらない人間になってしまったんだね！？」

よし！

そろそろ流すか。

「そんな臭い訳ねえだろ？少なくとも俺は、この周りに散らばってる死体の異臭しかないぞ。」

「確にそうなんだけどね、何かなかったのかい？こう・・・今日誰かとぶつかったとか。」

ぶつかった？

「特にそんな事は無かったが・・・」

いや待てよ

その時俺の頭には、花園鈴弥の顔が浮かんた。

「あ、ぶつかったわ。今日、同じクラスの女子に」

「なるほどねえ・・・。」

1人で納得する忍野。

「東城くん、おそらくその女の子が、この臭いの正体だよ。」

花園鈴弥が、臭いの？

「ちょっと待てよ、別に花園はせみ臭くなんてなかったし、少しぶつかったぐらいで臭いに移ると思えないんだが・・・」

「断言は出来ないけどね。なるほどなるほど、なかなか厄介だねこれほ。」

また一人で納得してやがる。

「おい、一体それがどうしたって言うんだよ？」

「東城くん、その女の子とは仲は良いのかい？」

「いや、全く良くないが」

即答できるのが、少し悔しい気もする。

「駄目だよ東城くん、クラスの女の子とは一週間以内には仲良くな
ってないよ。」

こいつが言うよ

なんかすげームカつく・・・

「何だよその法則は！近寄り難いんだよ、いつも一人でいるし」

「一人でいるねえ・・・。」

死体をパンパンに積めたゴミ袋を縛り、忍野がニヤついている。

「女の子に寂しい思いをさせちゃあ駄目だよ東城くん。紳士として
あるまじき行為だよそれは」

「アイツは寂しいだなんて思っていないんじゃないか？自分から孤立
してるみてえだし。」

そういやアイツって

時々他の女子に話かけられても、反応微妙っぽかったしな。

そんな奴が寂しいだなんて

「まあとにかく、一回その娘の事を見ないと分かんないからね。東
城くん、明日ここに連れてきてくれよ。」

何？

俺は周りを見渡した。

薄暗い空間。

片付け中の死体。

異臭。

忍野キギ。

まともに喋った事もない奴を、こんな不気味な所に連れてくるなんて・・・

「出来る訳ねえだろ!？」

「なんで今僕の名前があったのかは流すとして・・・」

ふむ。

「そこを何とか頑張って連れてきてくれよ東城くん。ちまりちゃんを手に入れたみたいにな、こう、ガツっとさ!」

「手に入れたって何だよ! 変な言い方はやめろ! つーか逆に俺が手に入れられたんじゃないか?」

その瞬間、忍野はちまりのアドレスが書いてある紙を取り出した。

「これの為にもさあ、頼むよ。」

おい

ちょっと待てよ

「それはこの死体処分の報酬じゃなかったのか!？」

「細かい事言わずに頼むよお、これも一種のバイトだと思ってさあ。」

このオッサンは・・・！

「分かったよ！連れてくりゃいんだろ、連れてくりゃ！」

まあ、俺自身も少し気になるしな。

「さっすが東城くん！やっぱり男だね、いろんな意味で。」

決してアドレスの為だけじゃない
違うぞ！

「その代わり、俺はもう帰ってよろしいですか？」

「何を言ってるんだい東城くん、途中で投げ出すのは良くないよ。」

いやいやいや

大量にあった死体達は、あらかた片付いていた。

「もう充分だろ！？これくらいならお前1人でも・・・」

忍野は俺の話を聞かず、巨大なダンボールの山からひとつ開け、中身を俺に見せた。

ダンボールの中は

大量の生き物の死体。

えええええ！？

「か、勘弁してくれ！俺は帰・・・」

「いいのかな？これが燃やされても・・・」

「っ！？」

俺が振り替えるとそこには

アドレスが

燃さ・・・

「やめろおお！！」

その後、結局夜の11時頃まで付き合わされた俺。

俺は家に帰った後、とりあえず制服を死ぬ気で洗ったとき。

昨日はひどい目にあった

うん。

自転車をこぎながら俺は、昨日の夜を思い出していた。

忍野の野郎・・・汚ねえ事しやがって・・・

今の俺は、どんなグロい物を見ても驚かない自信がある。

「くそ、未だにあの異臭が鼻から離れねえ！」

イライラしながら自転車をこいでいたら、いつの間にか学校の近くまで着いていた。

その時

キンコンカンコン

「あれ!？」

携帯で時間を見た俺。

8時35分

丁度朝のHRが始まる時間。

やべえ!!!!

すべに周りには誰も存在しない事に気付いた俺。

このままじゃ遅刻だ!

いや、もう遅刻してるじゃねえか!

「くそ!これも全部忍野のせいだっ!」

俺は普通に逆ギレして、自転車を猛スピードで走らせた。

と

その時

前に小柄な女の子

またかよオイイイ！！

俺は全身に全ての力を込め、女の子をギリギリかわした。

あ、あぶな・・・。

「はあ・・・はあ・・・、悪い、大丈夫か？」

あ・・・

振り向いた先には、花園鈴弥が居た。

「・・・・・・・・っ。」

2回目は不味い

不味いよ。

「わ、悪いな。急いでてさ」

「わざと・・・？」

花園が喋った。

花園が睨んだ。

「え？あ、いや、ちょっとスピード出しすぎてさ」

「2回目なのに・・・」

はい

すいません。

「す、すまん！遅刻だったからさ・・・。つか、花園も遅刻しちまうぞ！？」

「はぁ・・・。」

ため息をついた花園は、さっさと歩き出してしまった。

「ほ、ほんとごめんなー！」

俺の声を完全に無視して、遠ざかっていく花園。

「あちゃー、怒ってんな、あれ」

俺は花園と距離が離れるように、少し遅れて動き出した。

時間がやばい

だけど気まずい！！

諦めよう・・・。

トボトボ自転車を引きながら、学校に到着した俺。

自転車置き場に行くと

そこには

「と、東城く〜ん！」

子猫に追い掛けられている、ちまりが居た。

「た、助けて〜！」

ああ

なるほどな

あの子猫は呪念体だ。

俺は一目見て分かった。

あの時のチワワと同じ雰囲気が出たからだ。

「な、何してんだ？」

「見たら分かるでしょ〜！この子猫ずっと追い掛けてくるんだよ〜！助けてよ〜！」

こんなちっちゃい奴にまで狙われてんのか、ちまりは。

「ったく！」

俺がちまりに近付くと、何故か子猫は立ち止まり、俺を見た。

「・・・・・・・・。」

真っ直ぐ見つめてくる子猫

「な、何だよ？」

「プッ・・・・！」

な・・・・！？

子猫は俺を鼻で笑い、走りさってゆく。

んだよ・・・・なんなんすか！？

「よ、良かったー！ありがとう東城くん！怖かったよ・・・・」

ちまりが抱きついてきた。

「ちょ、おい！？」

な、何だこの美味しい状況は！！

っーか

「俺が来る前に、女子が1人通っただろ？」

俺の前に、花園がちまりの事を見たはずだ。

「通ったよ。でもね、でもね、なんか助けてくれなかったんだよ！？」

「助けてくれなかったってお前・・・」

ん？

あ、そうか！

呪念体は普通の人間には見えないんだっとな。

つまり花園には、ちまりが1人芝居をしていたようにしか見えなかった訳だ。

「なるほどな。」

「え？なに？1人で納得しないで教えてよ〜！」

「何でもねーよ、行こうぜ。」

「え？あ、ちょっと待ってよー！」

何か

朝からすっげえ疲れた・・・。

予想通り

朝のHRをやってる

まさに今、HRが行われている。

俺はバレないように、忍び足で教室に入り、席に座った。

「バレてるぞ、東城。」

「はいすいません。」

あっさり。

隣を見ると、獅子渡が爆笑していた。

「バレてるぞ東城っ！小さい女の子にでも見とれてたのか？」

「お前じゃあるまいし、普通に遅刻だよ遅刻！くそっ」

「嘘付けよく、どうせロリッ娘のパンチラでも見てハアハアしてたんだろ？」

パンチラ、か。

「そっちの方が良かったよ、俺は。」

昨日の夜と言い、今日の朝と言い、最悪だぜまったく。

「そーいやさ、今日の体育斎藤らしいぜ？」

「ゲッ、まじ？」

斎藤。

それは、まれに俺達の学校に授業しに来る体育の教師

めっちゃめっちゃ厳しいんだコレが。

「遅刻しちまったって事は、お前今日は体育やれないな。はっはっはー！」

ムカツク・・・！

でもまあ、こいつの言う通り斎藤の授業の時、遅刻した生徒は授業に出れない。

つまり今日は、自習だ。

「嬉しいんだか悲しいんだかだよ、ほんと。」

「頑張れよっ？図書室での自習とか、俺は耐えらんねえな〜！」

そうか

図書室でやるのか・・・。

「あ！そういや今日はお前だけじゃなくて、花園鈴弥も遅刻してたぜ？」

「ああ、知ってる。」

「うわー、あいつと2人で自習とか、まじ頑張れよ？いろんな意味で。はっはっはー！」

まったくこいつは

朝から元気だな。

「いろんな意味って、どーゆー事だよ？」

「そりゃお前、沈黙に耐えたり、欲求に耐えたりだよ！」

欲求？

「はあ？何で自習で欲求なんだよ？」

「そりゃお前、女と2人きりだったらやばいだろお前。」

そうゆう事かよ！

「俺はお前と違って、ロリには興味ないから大丈夫だって。」

「べ、別に俺は花園鈴弥がロリだとは言っていないだろ？」

なんて馬鹿馬鹿しい会話なんだ・・・。

「獅子渡、お前さ」

「ん？なんだ？」

「鼻毛出てるぞ？」

「失礼しまーす。」

俺は不安と絶望を胸一杯膨らませて、図書室の扉を開けた。

「あれ？」

そこにはすでに、2人の女子が自習を始めていた。

花園と

ちまり？

あ、そういうちまりも遅刻してたんだよな。

「ん・・・？」

よく見ると、2人は何やら話をしていた。

花園が女子と話してるなんて
めずらしい事もあるもんだな。

「それでねー？あ、東城くんっ！」

「よ、よお。自習とかめんどくさいな」

花園とちまり、2人に話かける感じで言う俺。

「ほんとだよな！あたし体育好きなのにさ」

「……………」

当然花園の返事は無し。

「あ、あはは、まあ頑張ろうぜ。」

さりげなく花園の前に座る俺。

さっそうと俺を睨む花園。

「あ、あのさ、花園？」

花園は何も言わず、俺の目を見てきた。

「その、まだ怒ってる？」

「別に……。」

う……

やっぱり俺嫌われてる？

まあ、第一印象最悪だったしな。

「え、何？鈴弥ちゃんと東城くんて知り合いだったの！？」

「いや、まあ、知り合いと言うか……」

「違うよ、あかの他人。」

即答。

事実だけどさ

なんか悔しい。

今日は忍野の所に、花園を連れていかなければいけない。

この気まずい関係をなんとかしなくては……。

「あ、あのさ、ちまりと花園は仲良いのか？」

「うん！さっき初めて喋ったけど、もう仲良くなったよ！」

なに？

あの花園とそんな短期間で仲良く？

「ねっ？鈴弥ちゃんっ！」

「う、うん……。」

花園は少し恥ずかしそうに頷いた。

何か……

扱いが違い過ぎね？

まあ俺が悪いんだけどさ。

「へ、へえ、そうなんだ。花園が喋ってる所あんま見た事無いから、少し驚いたわ。」

「私だって人間だから、ちゃんと喋るよ。」

少し不機嫌そうに言う花園。

そうだよな。

花園だってちゃんと喋るよな。

「なんか安心したよ、花園も普通に話したりするんだな。」

「私って、あんまり良い印象持たれてないのね。」

「え？」

俺は返答に困った。

クラスでもあんま喋らないし、確にあまり良い印象は持たれてないと思う。

「い、いやほら、印象って言うか、花園ってあんま喋らないだろう？だからさ・・・」

「・・・・・・・・。」

花園は少し寂しそうにうつ向き微笑んだ。

花園もそうゆう事やっぱ気にしたりするんだな・・・

「鈴弥ちゃんて、クラスの皆とかと話したりしないの？もしかして、クラスが嫌いとか？」

俺が気になっていた事を

ちまりはサラリと聞いてくれた。

「……うん、嫌いだよ」

マジでか

花園がそんな風に思ってたなんて、ちょっと意外だ。

でも何でだ？

クラスの奴らは花園に話かけたりしても、花園から拒否してる感じだし……

なんか他に理由でもあんのか？

「なあ花園、なんで嫌いなんだ？まさか、イジめとか？」

少し心配だった。

「だって、東城くんがいるんだもん……」

そう来たか

ちまりの視線が痛い……

「な、何だよ？」

「東城くん、まさか鈴弥ちゃんに何かいやらしい事したの？」

「違う！！いやらしい事はしてない！決してしてない、断じてしてない！」

何もしてないと言えなかった俺は、『いやらしい事』はしてない事を胸を張って言った。

「東城くんは私の事、嫌いみたいだから・・・」

ちよ・・・

「とっじょくくん？」

何故だぁー！！

「ちょっと待て！花園！俺は決してお前の事が嫌いな訳じゃない、アレは事故なんだ！信じてくれ！」

「胸触った事？」

えーっとう・・・

はい？

「東城くん！やっぱ鈴弥ちゃんにいやらしい事してんじゃん！」

「ちよ、ちょっと待ってくれ！そんな事した覚えは・・・」

「げだものー！東城くんのふけっ！変態小僧ー！東城くんの腐れ童貞！」

そこまで言われる覚えは無いよ

「童貞は関係ないだろっ！つーかちまり！お前実は結構言う人なのね！？」

「鈴弥ちゃんみたいなか弱い女の子を襲うなんて、何を考えていると言うの！？」

「なんで胸を触ったから襲うにグレードアップしてんだよ！花園、お前から何か言ってやってくれ！？」

「ぷっ・・・」

あ・・・

「ふふっ・・・あはははっ」

花園が、笑った。

何だ

ちゃんとそんな顔もできんじゃない。

「ふふっ・・・、嘘だよちまりちゃん、東城くんとはぶつかりそうになっただけ。嫌いじゃないしね」

「あ、そうなの！？なんだ、それを早く言ってよ東城くん！」

童貞を批判された上に軽く逆ギレされてる俺って・・・

「ま、まあそんな事は良いとして、なんでクラスが嫌いなんだ？」

「嫌いなんじゃないよ。あたし・・・もうすぐ死ぬから・・・。」

その瞬間、俺とちまりは啞然した。

「え、それって・・・」

「私はもうすぐ死ぬの。だから深入りしたくない、ただ、それだけ・・・」

「もうすぐ死ぬって、それ本当なの・・・？」

「うん。あと1日で、私の命は終わるの。」

とんでもない事を聞いてしまった。

あと1日・・・

花園が、死ぬ？

「もしかして、病気か何か持ってるのか？」

「ううん。呪いをかけられちゃったの、6日前に」

「呪い？」

「6日前のあの日、大きな蟬に呪いをかけられちゃったの。」

大きな蟬・・・

せみ・・・

「せ、蟬に？だってもう冬だよ？」

普通に見ればとんでもない話だ。

大きなせみに呪いをかけられた？
とても信じられない。

とゆうか信じる以前に

話がすっ飛んでる。

「ねえ東城くん、もしかして鈴弥ちゃんが言ってるのて・・・」

でも俺達は、その話を信じる事が出来る。

「ああ、呪念体だよ、それ」

おそらく花園が言ってる事は本当だ。

そしてその大きな蟬は

呪念体。

「知ってるの？あの大きな蟬の事」

花園が真っ直ぐな瞳で聞いてきた。

何て説明すりゃいいのか・・・

「と、とにかく！あと1日で死ぬって言うのは本当なのか？」

「え？う、うん……。どうかしたの？」

なんかやばい事になりそうだな……

早く忍野の所に行った方が良さそうだな。

「花園、今日の放課後空いてるか？」

「う、うん。大丈夫だけど……」

「ちょ、東城くん！鈴弥ちゃんがかawaiiのは分かるけど、こんな時にデートの誘い！？」

俺はあえて突っ込まなかった。

「お前に会わせたい人がいるんだ、放課後に門の前で待っていてくれないか？」

「う、うん、分かった。」

花園は少し戸惑いながら、コクリと頷いた。

不味い事になりやなきやいいけどな……。

「おーい忍野ー！いるかー？」

自称『なんでも屋』の忍野が住む薄暗い建物へ、花園を連れてやってきた訳だが……

「・・・・・・・・っ」

「くさっ!!!」

俺の鼻は覚えていた。

昨日処理した生き物の死体の異臭が、未だに充満していた。

何をやってるんだよアイツツ・・・!

「忍野さんの所って、こんな臭かったっけ・・・!?!」

ちまりが鼻を摘みながら驚いている。

「いや、それが昨日・・・」

って・・・

「何でお前までいるんだっ!?!」

「あたしも心配だもん! 鈴弥ちゃん心配だもん!」

ちまりがベタベタと

花園に抱きついている。

まあいいけどさ。

「あら、東城くん?」

不意に、奥から声がした。

この声は

「お久しぶりですね東城くん。わあ・・・両手に花ですねっ！」

奥から現れたのは忍野ではなく
宇宙服のような物を来て、ヘルメットをかぶって、大きなマスクを
してる・・・

誰！！？？

「あの、失礼ですけど貴方は・・・」

「志乃です。鎖蛇志乃ですよ。」

マスクを取るとそこには、確かにあの志乃さんの綺麗な顔があった。

「あ、何だ志乃さんか・・・」

突然蘇る俺の記憶

志乃さんを見た瞬間、首を噛まれた事を思い出してしまった。

い、いかんいかん！

俺は何も考えてないぞ！いやらしい事なんて、絶対考えてないから
な！

「今日は、どうしたんですか？ わざわざここまで来るなんて」

「あ、そうそう！ 忍野って今居ますか？ ちょっと用事があった」

「はい、居ますよ。ちょっと待ってて下さいね？」

志乃さんはそう言うと言とマスクを付け、再び奥に入って行った。

な、何をやってるんだ一体・・・

「ねえ、東城くん」

「ん、なんだ？ ちまり」

「臭い！」

え？

「臭いよおー！ いつまでいればいいの！？」

んな事言われてもなあ。

「あのなあ、お前が来たいって言ったんだろ？ 無理しないで帰って
も・・・」

「て、鈴弥ちゃんが言ってるよ！」

「え、え？」

鈴弥が動揺してる

こいつ最低だ！

「花園を使うなっ！俺だって我慢してんだから、文句を言わないの！」

「ぶー！」

花園のツインテールをいじりながら、ちまりがいじけている。

ほんとに心配してんのか？ちまりは・・・

「ちまりちゃん、そのお嬢ちゃんには、あんまりベタベタ触んない方がいいと思うよ」

この声は・・・

忍野登場。

普通の服に戻った志乃さんと一緒に、忍野が現れた。

「そのお嬢ちゃんにあんまり触れてると、蟬臭いのが写っちゃうよ」
「？」

最悪だ

このオッサン最悪だよ

さりげなく最悪な事言ってるよ。

「おい忍野！そうゆう事言うなよ、可哀想だろ？」

「そんな怒るなよ東城くん、軽いジョークだよジョーク。」

軽くねーよ！

実際言われたら傷付くよ？ うん
だって『蟬』臭いだもの。

「で、そのツインテールちゃんが、昨日東城くんとぶつかったって
ゆう例の？」

忍野が花園を指さした。

「あ、ああ。花園鈴弥って言う、クラスメイトだ。」

「やっぱり。そのお嬢ちゃんの間違いないよ、この『匂い』の原因
はね。」

「つまり、どうゆう事・・・」

「あの・・・！」

俺の言葉を横切って、花園が言った。

「分かるんですか？ あの、大きな蟬の事が」

「ああ、分かるよ、分かるとも。」

ソファアに座った忍野がタバコを取りだし、吸い始めた。

「運が悪いねー君！ 七日蟬なのかぜみに呪われちゃうなんて」

「え・・・七日蟬？」

「忍野さん、その七日蟬って言うのは？」

「文字通り、セミだよセミ。ほら、前にちまりちゃんを襲ったチワワと同じ、呪念体」

呪念体

どうゆう事なんだ？

「知ってるんですか？ やっぱり・・・私の呪いの事も・・・」

「知ってるとも。七日蟬に呪いをかけられたら、7日後に死んでしまうんだよ。呪いをかけられた丁度7日後にね。」

7日後・・・

「なあ花園、呪いをかけられたって言うのは・・・」

「いまから丁度6日前・・・学校の帰り道で・・・」

なんてこった

それじゃやっぱり花園の言う通り、あと1日しか、花園の命は・・・

「た、助ける方法はあるんですよね？」

ちまりが心配そうに聞く。

「忍野、どうすればいいんだ？ どうすれば、花園を・・・」

「・・・・・・・・。」

急に黙り込む忍野

な、何だ

何だよ。

「七日蟬は厄介な呪念体でね、他の呪念体とは、少し違うんだよ。」

「呪いを解くのは・・・難しいって事か？」

「無理何だよ、解くの。」

え・・・・・・・・？

その瞬間、全員の目の色が変わった。

すずみシカード 3ノ巻

呪いを解く方法がない。

「ちょ、ちよっと待てよ！方法がないって、そんな・・・」

「七日蟬は特殊な呪念体なんだ。他の呪念体みたいに、ただ『何か』を盗むだけじゃない。」

忍野の目つきが変わった。

「盗み返す事なんてできないし、盗む事もできないんだよ。」

「う、嘘でしょ？そんな・・・」

ちまりが啞然してる。

納得いかねえ・・・。

「やっぱり、どうにもならないのね・・・。」

全てを悟り、諦め顔の花園。

そんな・・・そんなのって・・・！

「方法がないなんて嘘だよな忍野！？また、何かの冗談なんだろう？」

「僕は冗談が嫌いだよ、東城くん。ああ、七日蟬はもっと嫌いだ。」

そんな・・・。

「し、志乃さん！本当に無理なんですか！？本当に・・・」

「すいません・・・」

顔を背ける志乃さん。

ふざけんなよ・・・！

「そ、そんなのってあるかよ！花園は何も悪い事してないんだぞ！
？そんなの・・・」

周りにちまりの泣き声が響く。

「そんな・・・そんな！すずみちゃん死んじゃうの！？やだよお・・・」

「ちまりちゃん、泣かないで・・・？かわいい顔が台無しよ？」

花園がちまりをそっと慰める。

「どうして泣いてるんだい？ちまりちゃん」

なに？

忍野が不意に、ちまりに声をかける。

「なんでそんな騒ぐんだい東城くん？そのツインテールちゃんとは、
話した事もない他人だったんだろ？」

確かに俺たちと花園は、話したのは今日が初めてだし、そんな風になるのはおかしいかもしれない。

でも……。

「悲しすぎندろうが……、こんな……」

花園はただの女なんだ

何の罪もない、ただの。

それなのに……、呪念体に呪われて、もうすぐ死ぬだと？

「僕には理解できないなあ、そんな仲良い訳でもないのにね。」

「お前は何とも思わないのかよ!! 可哀想とか、思わねえのか!？」

「……。」

黙り込む忍野。

何とか言えよ……

頼む

何とか……言ってくれよ……。

「もう、そんな怒鳴んなくてもいいじゃないか。分かったよ、分かっただけから。」

「分かったって……、何がだよ?」

「あるよ、七日蟬の呪いを解く方法。」

な・・・

「え・・・!？」

俺とちまりと花園、3人が声を揃えて驚いた。

「ほ、本当か!？助かるのか？花園は」

忍野はタバコを吸い終え、灰皿にそつと置いた。

「ああ、あるともさ。ただ、これは東城くんにはしか言えない事でね、ちまりちゃんとツインテールちゃんは、ちよつと外に出てくれないかい？」

俺にしか、言えない事？

忍野がそう言うと、志乃さんがちまりと花園を連れて外に出てしまった。

「お、おい！ちまりはともかく、花園には言ってもいいんじゃないか？」

「東城くん、本当に助ける気なのかい？あのツインテールちゃんのこと」

何を今さら・・・

「あ、ああ！助けられるなら、助けたいさ！」

俺は何故か、堂々と胸を張って言えた。

「それで、その方法ってのは？」

「七日蟬の呪いを解く方法はひとつ・・・」

ゴクリ・・・。

「君の命を捧げる事だよ、東城くん。」

え・・・。

なん・・・だと？

「七日蟬は呪念体を喰らう生き物でね。特殊な呪念体である、君の心臓をあげれば、きっと呪いを解く事ができるって訳だ。」

何・・・言ってるんだ？

「俺の命を、捧げる・・・。」

「僕はその方法で、何人かの命を救ってるからね、間違いないよ。」

俺が死ねば、花園は助かる・・・

驚きが隠せなかった。

「驚いたかい？なるべくこの事は君には言いたくなかったんだけどね。どうするんだい？」

「お、俺は・・・」

図書室での花園の笑顔が、頭に浮かんだ。
命を捧げる・・・

花園を助ける為に、俺が死ぬ・・・？

「やっぱり、迷ってるね東城くん。君みたいなお人好しもめずらいね。」

お人好し・・・か。

普通だったら、そんなの迷わねえよな。
他人の為に、自分が死ぬなんて
有り得ない事だ。

「七日蟬はそうやって人の命を呪い奪い、生きながらえているのさ。」

「どうして、花園なんだろうな・・・」

どうしてなんだ・・・

呪うべき相手は、他にもたくさんいるだろうが・・・
どうして、花園が・・・。

「七日蟬は、希望や光、夢が嫌いなんだ。」

「え．．？」

「だから、希望も光も夢も無い人間を呪う。きっとあのツインテールちゃんに、そう言ったものは無かったんだろうね。」

希望や光、夢．．

「どうするんだい？東城くん。こりゃ大事な選択だよ」

．．．．。

「俺が死ねば、花園は絶対に助かるのか？」

「ああ、間違いなくね。答え、決めたのかい？」

「ああ．．！」

答えは、決まってる。

忍野は俺に背を向け、再びタバコを吸い出す。

「今日の夜11時59分、儀式をするから、もし助ける気があるなら、それまでにここに来てくれ。」

11時59分

きつと0時になれば、花園は消えてしまうからだろうな。

「ああ、分かった。」

「できれば、僕は今日の夜は君に会いたくないよ。」

「お互い様だっ！」

外に出ると、辺りはもう暗くなっていた。

ちまりと花園、志乃さんもいた。

「東城くん!!」

大声で俺を呼ぶちまり。

「うっさ!! もう夜なんだぞ!!? もう少し声のボリュームを下げなさいよ!」

「すずみちゃんを助ける方法は!?!」

スルーかよ・・・。

「喜べ、花園! 助かる方法が分かったぞ!」

俺は花園を目を見て言った。

花園はあまり表情を変えないけど、それでも驚いてる事はすぐ分かった。

「本当・・・本当に・・・?」

「ああ、本当だ！」

「それで、その方法とは！？」

ちまりがしつこく聞いてくる。

「その方法はな・・・」

ゴクリ・・・

ちまりと花園は唾を飲んだ。

「その方法はなー！？」

とことんじらす俺。

「ほ、方法は・・・？」

声を揃えて言う2人。

「花園の夢を叶える事だ！」

「え・・・？」

驚く花園。

「だから、お前の夢を叶える事だよ花園！他の誰でもない、お前の夢だ！」

「ちょ、それってマジなの？東城くん」

「ああ、大マジだぞ。」

俺とちまりは、花園を見た。

「私の、夢……。」

七日蟬は、夢を持たない人間を呪うと言った。
だから花園が呪われたと。

そんな事ない！

きっと花園にだって、ひとつの夢ぐらいあるに決まってる。

花園だって、皆と同じ、ちゃんと生きてるんだから。

「星空が、見たい……。」

花園が言った。

「たくさんの星が輝く、綺麗な空を見たい……。」

ちゃんとあるじゃねえか

お前の、花園だけの夢。

「そっか・・・、やっぱお前にもちゃんとあるんだよな、夢がさ!」

「東城くん、失礼・・・!」

花園は膨れて言った。

「素敵な夢だねえ!」

ああ

本当にな!

「星かぁ・・・、ここらへんは建物が邪魔で見えないしな・・・、どうすっか?」

「うーん、あたしの家からでも、あんまり良く見えないしなぁ・・・、どうしよう?」

俺とちまりは、たくさんの星が見える場所が何処かにないか考える。

たくさんの星が見える場所・・・

イオンの屋上?

いや、駄目か。

学校の屋上?

いや、入れないか。

「あの・・・?」

志乃さんが、声をかけてきた。

やばい

志乃さんのセリフ皆無だった。

「ここから少し行った先にある高台で、とても綺麗な星がたくさん見える場所がありますよ?」

「え、本当ですか!?!」

ナイス! 志乃さん!

「で、でももう遅いし・・・、私の為なんかにそこまでしなくても・・・」

「行こ! すずみちゃん!」

「えっ!?! あ、ちょっと!」

ちまりは花園の言葉を聞かず、花園の手を取って走り出した。

「お、おい! 俺を置いてくんじゃねーよお!」

「優しいんですね、東城くん。」

2人を追おうとした俺に、志乃さんが言った。

「ん、何がですか?」

「七日蟬の呪いを解く方法は、夢を叶える事なんかじゃない。」

え……？

「知ってるんですか？ 志乃さんも・・・」

「あの人と一緒にいると、嫌でもそう言う事が分かっちゃうんだ、うん。」

少し恥ずかしそうに、志乃さんは舌を出して言った。

「東城くん、答えは決まっているの？」

「はい・・・！ 決めてますよ、あんま悩まなかったけど」

少し、恥ずかしいな。

「そう……。やっぱり優しいね、東城くん。」

「いや、全然優しくなくてすよつ。俺なんて、駄目駄目です・・・」

志乃さんとともに会話するのは初めてだ。

なんか無駄に恥ずかしいな・・・。

「お人好しで優しい東城くん……。まるで、お兄ちゃんみたい。」

「え、お兄ちゃんて？ 志乃さん、兄弟がいるんですか？」

「本当のお兄ちゃんじゃないんだけどね？ 大好きな、私の自慢のお

兄ちゃんがいたんだっ。」

驚いたな・・・。

志乃さんの兄って事は、相当美形なんだろうな。

「でね、その人の名前、暦こよみって言うんだよ？めずらしいでしょ。」

「こよみ、ですか？すごい名前ですねっ」

志乃さんは楽しそうに話してる

その暦こよみって人の事、凄い好きなんだろうな。

「あー！いけない、ごめんね？こんな話しちゃって」

時間を見ると、既に9時になろうとしていた。

「あ、いえ！なんか志乃さんとちゃんと会話したの初めてなんで、すげー嬉しかったです！」

「そう？ありがとう、東城くん。その優しさで、鈴弥ちゃんも笑顔にさせてあげてね？」

「・・・はい！」

俺はそう返事し、急いで2人を追って走り出した。

もしかすると、志乃さんは俺が選んだ答えを知っているんじゃないか？

そう思った。

俺が高台に着いた時、ちまりと花園は既に寝転がって、空を見ていた。

空を見ると・・

「す、すげえ・・・！」

数えきれない程の星が

夜空で綺麗に輝いていた。

凄い・・

まじで・・すげえ！

「す、凄いな、こんな綺麗な星見た事ねえぞ！」

あまりの綺麗さに、俺は驚きを隠せなかった。

「あ、東城くん遅い！ほら、一緒に寝転がって見よ？」

「あ、ああ」

それはいんだけどさ

何でちまりと花園の間がこんな空いてんの！？

「な、俺が真ん中？」

「いいから！早く！」

くっ・・恥ずかしいがしょうがない

一気に寝転がる俺。

川の字になって寝転がり、無数に輝く星を見る俺たち。

ちまりは目をキラキラさせながら、夢中になって見てる。

「凄いねえ・・東城くん、すずみちゃん！ほんと凄いね！」

興奮しすぎじゃね！？

何てツツコミも、今は辞めておこう。

それぐらい凄い、星空だからな。

「きれい・・・！」

不意に聞こえた、花園の言葉。

「花園、夢、これで叶ったか？」

「う、うん！」

今までにない顔で、星空を見る花園。

ちまりに負けないくらい、目を輝かせて。

「星、好きなのか？」

「うん……。私、ずっと星だけが友達だったから……。」

星だけが、友達？

「私ね、体が弱くて高校生になるまでは、ずっと入院生活を送ったの。」

そうだったのか……。

「最初は友達もお見舞いに来てくれた。手紙だってくれたし、家にも遊びに来てくれた。でも……。」

花園は寂しそうに話してる。

「時間が起つにつれて、友達が知り合いに変わって、いつの間にか他人になってた。」

「まじかよ……。」

「親も仕事が忙しくて、私の事なんて構ってくれなかった……。でもね……。星は違ったんだ。」

花園は手をかざした。

「私しかない病室、でも、窓からはたくさんの星たちが、私の事を見ててくれたの。暗かった私を、ずっと照らしてくれてた。」

「星たちが・・・？」

「うん・・・、だから私は星が好き。どんな時も、私を見てくれた、星が！」

花園の顔はいつの間にか、笑顔に代わっていた。

「またこうやって綺麗な星たちに会えて、本当に嬉しい・・・」

その笑顔は図書室で見た笑顔よりも、ずっとずっと輝いていた。

「花園・・・」

「ありがとう、東城くん。君たちに出会えて良かった・・・。死ぬ前に、こんなに綺麗な星たちに会わせてくれて、本当に・・・ありがとう・・・とう・・・。」

花園の目から、大粒の涙がこぼれた。

「死にたくない・・・死にたくないよお・・・！」

え・・・？

「だ、大丈夫だって！花園の夢は叶ったんだ、もうお前は死なないって！」

何だ・・・

一体どうしたんだ？

「嘘なんでしょ・・・？夢を叶えれば助かるなんて、本当は嘘なん

だ・・・」

な・・・

何でその事が!?

「そんな事ねえよ! 大丈夫、大丈夫だから!」

「私、分かる、呪いは解けてない・・・、解けてないんだよね・・・」

「すずみ!!」

不意に、花園を抱き締める俺
恥ずかしいなんて、考えてる暇はなかった。

「大丈夫だ! 必ず助かる、助かるから・・・!」

「ぐすつ・・・ひつく・・・、東城くん・・・。」

「ずっと辛かったんだよね・・・、俺が、必ず助けてやるからな・・・」

俺は花園を強く抱き締める。

会って間もないとか、他人だからとか、そんなの関係ない。
俺が出来る事は、全部やる。

花園は死んじゃ駄目だ。

絶対に、駄目なんだ。

俺は改めて決心して、花園が泣き止むのを待った。

「あ、ありがとう東城くん、もう・・・大丈夫・・・。」

あれから数分後、花園が泣き止み、落ち着きを取り戻した。

「あ、そ、その、悪い！」

抱き締めた事を謝罪する俺。

何てこった・・・

恥ずかしいと言う感情が、一気に込みあげてきた。

「ううん・・・、凄い嬉しかったよ？ありがとう・・・」

「そ、そっか！」

花園の意外な言葉

嫌がるかと思っただぜ。

「なんか、凄い恥ずかしい・・・」

へ？

「私って、泣くとかそう言うキャラじゃないでしょ・・・？だから・・・その・・・、ごめんね・・・？」

まあ確にちよつと驚いた。

あの無口な花園が、こんなおお泣きするなんてな

まあ、それも今さらだけど。

「・・・はっ!？」

突然、後ろから物凄い気を感じた？

「むゝ・・・!!」

後ろを振り向くと、ちまりの姿が・・・。

やばい

存在忘れてた。

「2人だけの世界に入るなー!!」

「わ、悪い!頼む許して!童貞でいいから許してくれえ!」

ちまりは花園を家まで送ると行って、帰って行った。

時計を見ると、既に11時をまわっていた。

「あれからもう2時間も経ったのか、早いな・・・。」

『死にたくない・・・死にたくないよお・・・!』

花園・・・

俺が、必ず・・・!

「俺が必ず助けてやる。とでも言うのかしら?」

突然聞こえる、女の声。

「な、誰だ!?!」

俺が振り向くとそこには、ホチキスを持った長髪の女が立ち尽くしていた。

「初めまして、東城式君。」

「あんた、誰だ? 何で俺の名前を・・・」

「私は、戦場ヶ原ひたぎ。あ! いえ、阿良々木ひたぎと呼んでくれた方が、貴方にとっても私にとっても、気分が良い感じになるわね。」

せ、せんじょうがはら?
ひたぎ?

「ど、どーも。俺、ちょっと急いでるんで・・・」

こんな女に構ってる暇はない。
早く忍野の所に・・・

「待ちなさい。」

危っ！！

俺の顔面スレスレで、ホチキスを突き立てる女。

「な、何だよ！一体何なんだ！？」

「貴方、まさか本当にあの娘を助ける為に、自分の命を捧げると言うの？」

は、は？

「な、何でそれを？」

「答えなさい。貴方、本当に儀式をやりに行くつもりなのかしら？」

「あ、ああ！行くよ！」

そうだ

俺は誰に何と言われように行く。

俺は花園を助けたい。

呪いなんかで、殺させてたまるかつ！

「そう・・・そうなのね。」

急にホチキスをしまい、俺に背を向ける女。

わけかわんねえ・・・！

「会って間もない娘の為に自分の命を捧げるなんて、とんだお人好しね、貴方。」

「お人好しでもいい、呪いで人が死ぬなんて、間違ってる。」

「これだから童貞どもは・・・」

おい

聞こえたぞ

「な、なに！？なんでお前に童貞とか言われないといけねんだよ！」

「あら、耳が良いのね。貴方、童貞じゃないのかしら？童貞でお人好しだなんて、阿良々木君そっくりだわ。」

あ、あららぎくん？

「まあいいわ、また会いましょう東城式君。せいぜい死なないうちに頑張ってきて下さいコノヤロウ。」

そう言って、女はどこかに消えていった。

な、なんなんだ、一体。

とんでもない女だったな・・・
しかし・・・

童貞ネタはもうやめて欲しい

心からそう思った。

「はあ・・・はあ・・・」

あれから俺は走った。
とりあえず全力で走った。

「11時間50分。ギリギリ間に合ったね、東城くん。」

なんとか、たどり着いたみたいだな・・・！

「ずいぶん息があがってるね、どうした？」

「はあ・・・はあ・・・、そんな事は・・・いいから・・・、早く・・・儀式を・・・！」

「っ！？」

めずらしくあの忍野が驚いてやがる。

「東城くん、まさか本当に死ぬ気なのかい？」

「死ぬ・・・。」

ここまで来て、その言葉の意味を改めて考えた。

そうか、俺はもうすぐ死ぬのか。

『死ぬ』と言う事の重さを、俺は実感する。

花園を助ける為には、俺が死んで命を捧げなければならない。
花園を助けない

でも・・・

「ん、やっぱりまだ迷ってる感じなのかい？東城くん」

くそ

ここまで来て、何迷ってんだよ俺は！

花園は助けたい

でも、死ぬのは・・・

怖い。

『死』を前にして、俺の頭は恐怖で一杯になる。

「もう一度よく考えた方がいいんじゃないかい？あ、でもあまり時間はないけどね。」

「か、考えた結果だよ」

「死ぬんだよ？死ぬ。会って間もない1人の女の子の為に死ぬんだよ？普通に考えて、あり得ない事だよねえ」

あり得ない事か・・・

どうして俺は、花園を助けようと思ったんだ？

自分が死んでまで、花園を助けたいなんて・・・

「素直になっちゃえよ東城くん。」

「え！？」

「本当は死にたくないんだろ？そりゃそうさ、人間はいかなる状況であっても、自分の事しか考えられない生き物だからね。ツインテ

ールちゃんを助けても、君には何のメリットも無い。」

忍野の言葉が、痛いほど胸に突き刺さる。

「君は今、そうだな、ボランティア。ボランティアで自分が死んで人を助けようとしているんだよ？くだらねえと思わないかい？」

ボランティアって・・

しかし、忍野の言ってる事はまともだ。
花園を助けても、俺には何の得も無い。

俺も

死にたくない・・・。

「生きたいんだろ？いいさ、好きなだけ生きればいい。君の命だ、君が生きて何が悪いって言うんだい？」

確かに、忍野の言う通りだ。

俺にだって、生きる権利ぐらいある。

生きる・・・権利・・・？

だとしたら花園には、生きる権利は無いのか？

何もしてない、ずっと孤立して生きてきた花園には、生きる権利がないって言うのか？

あいつは、ずっと1人だったんだ。

学校に行く時も1人、教室でも1人、昼だって1人、帰る時だって1人だ。

あいつ自信から、孤立を望んでる訳じゃないのに。

ずっと1人で生きてきて、七日蟬に呪われて、もうすぐ死ぬなんてもう、星を見る事が出来なくなるなんてそっちの方が、よっぽどあり得ない。

「確かに、俺は死にたくない。馬鹿だなんて思われたって、仕方ねえ事だと思う。」
でも・・・

「俺は花園に生きて欲しい。生きて、もう一度星を見てもらいたいんだ。」

「東城くん・・・」

花園の涙は本物だった。

あいつ確かに自分の口で、死にたくないと言ったんだ。

「とんだお人好しだよ、君って。」

「ああ、自分でもむかついてるぜ。」

お人好しでも構わない。

それで花園が、助かるのなら。

「さあ、そこに立ってくれ」

「こ、ここにか？」

真っ暗な部屋、地面には不気味な文字がたくさん書かれてる。

こんな場所があったなんてな・・・。

ほんと、最後まで訳分かんねえ。

「時間が無いから速攻でやるけど、大丈夫かい？」

「最後は死ぬんだ、行き着くのは同じだろ？」

『確にな』と言わんばかりに忍野はうっすら微笑み、謎の文字を読み始めた。

儀式、始まったんだな。

もうすぐ死ぬんだな、俺。

不思議な事に、恐怖は全く感じない。

「残念だよ東城くん。君とはこれからも仲良くやっていけるかと思っただけだね。」

「呪念体と仲良くしたいとか、お前ちよつと変だぞ？でも、俺も正直少し残念だよ。」

これまでいろんな事があった。

いろんなつつーほどじゃないかもしれないけど

ちまりと出会って、デかいチワワに襲われて、忍野や志乃さんに出会って。

自分が呪念体だって分かった時は、すっげえ驚いたな。でも、あの時はちまりが助かって本当に良かったな・・・。

考えてみりゃ、とんでもない体験だったな。

「まあ、忍野には正直感謝してるよ、ありがとう。」

まさか忍野にこんな事言うなんてな。

「僕もだよ東城くん。君はとても面白い奴だった。正直、寂しいよ。」

驚いたな・・・

まさか忍野のが『寂しい』なんて言うなんて。

俺が死んだら、皆悲しんだりしてくれんのかな。

親父やにこ、獅子渡とか。

案外、誰もいなかったりしてな。

親父、馬鹿な子供で悪いな。

体には気をつけろよ・・・。

ちまりやにこや獅子渡にも、もう会えなくなるのか・・・。

正直、俺も少し寂しいよ。

意識が段々と無くなっていく。

「そろそろ死ぬみたいだ、忍野」

「東城くん・・・」

「ありがとうな、ちまりを頼むぜ。」

俺が死んだら、もうちまりを守る奴がいなくなっちまう。
俺はちまりを忍野に託し、光に包まれる。

花園、助かるといいな・・・。

「大変だ！東城くん！」

忍野の声で、目が覚める俺。

「ここは・・・どこだ・・・？」

光に包まれて、意識が無くなって、それから・・・

「どうなってるんだ？俺、死んだんじゃ・・・」

「落ち着いて聞いてくれ、東城くん」

忍野が真剣な眼差しで、俺の目を見る。
その時、俺は嫌な予感がした。

まさか・・・

「儀式は、失敗した。」

「は・・・？」

失敗？

失敗したって？

「えっと、それはつまり・・・」

「呪念体としての君の力がまだ足りてなくて、どうやら上手くいかなかったみたいだ。」

どういう事だ・・・

今だによく理解できない。

儀式は失敗した。

つまり、花園は・・・

「！！・・・花園は！？花園はどうなったんだよ忍野！！」

「儀式は失敗したから、おそらく・・・死んじゃったかな。」

死んじゃった・・・

花園が・・・死んだ・・・？

時間を見ると、既に夜中の0時を回っていた。

そ、そんな・・・

「助けられなかったのか・・・？」

そっぽを向き黙り込んでいる忍野。

「なあ、忍野！どうすればいいんだよ！どうすれば、花園は・・・」

花園は助かるんだ・・・？

あまりのショックの大きさに、言葉が出なかった。

俺は花園を、助けられなかった・・・。

助けられなかった・・・？

花園を救えなかったと言う真実が、俺を襲った。

「そんな・・・」

俺はいつの間にか涙を流していた。

嘘だろ・・・

花園・・・！！

花園鈴弥

正直、学校なんか行く気分じゃなかった。

儀式は失敗して、花園は死んだ。

俺は・・・花園を助ける事が出来なかった・・・。

もうあの笑顔は見れない。

もう二度と会う事は出来ない。

そう思うだけで、何もする気が起きなかった。

考えすぎなんかじゃない

花園を助けられなかった事もあるが

俺自信が、花園に何もしてやれなかった事に対して、絶望していた。

「なんでこんな無力なんだ・・・俺は・・・！」

俺に呪念体としての力がもつとあれば、花園を助けられた。

悔しくて仕方ない・・・

これからだったのに

花園の人生は、まだまだこれからだったのに・・・！

何も考えられねえ。

俺は無我夢中で、自転車をこいでいった。

と

その時

前に小柄な女の子

「おわっ！」

ギリギリでかわす俺。

なんなんだよ、ちくしょう……。

「悪い、前見てなかった」

そう言って、再びペダルに足を置く俺。

その時

「3回目……！」

え……？

「わざとしか……思えないんだけど……？」

振り返ると

そこには、すねて膨れる花園の姿があった。

「は、花園・・・!?」

「・・・、すすみでいいよ、東城くんっ。」

花園が・・・生きてる・・・!!

「お前・・・どうして!?!」

「え?だって・・・夢、叶えてくれたじゃない・・・。」

すすみ・・・

「ああ・・・、そうだよなっ!」

すすみは俺の自転車の後ろに乗り、微笑んで言った。

「行こう?遅刻しちゃう・・・」

「そうだな・・・、よし、行くぞっ!」

花園を乗せて、俺は自転車を精一杯走らせた。

「あ・・・!」

不意に声をあげる花園。

「ん、どうした？」

「蟬の抜け殻・・・」

そう言って、花園は自転車に付いていた蟬の抜け殻を俺に見せた。

それを見て、俺は思った。

きつとこれは、すずみの抜け殻なんだと。

すずみの本当の人生は、これから始まるんだと。

よく分からないかもしれないけど、ただ、そう思った。

もしかすると呪いを解く方法は、本当にすずみの夢を叶える事だったんだろうか？

俺は不意にそう思いながらも、自転車を精一杯走らせた。

これからちゃんと、生きて星を見る事ができる、すずみを乗せて。

「忍野さん」

志乃は微笑みながら、忍野にコーヒーカップを渡す。

「おお、気がきくね志乃、ありがとう。」

「2人きりなんだから、ちゃんとした名前で呼んで下さいっ」

「おーごめんごめん。えっと・・・、君のほんとの名前は・・・、撫子だったっけ？」

忍野がそう言うのと、志乃は嬉しそうに頷き、隣に座る。

「ちゃんと覚えててくれたんだね、ちょっと嬉しいですっ」

「おいおい、こう見えても僕は記憶力が良いんだよ？もちろんあの時の君のことだって・・・」

「それはいいですよっ！」

忍野はごめんと言わんばかりに、志乃に微笑む。

「どうして本当の事、東城くんに教えてあげなかったんですか？」

「七日蟬の呪いは、命を捧げれば解けるってやつかい？」

忍野はタバコを取り出し、吸い始める。

「七日蟬の呪いは、呪われた者の願いが叶えば解ける・・・じゃありませんでした？」

「そう、その通りだよ。いやあ、まさか東城くんがやってくれるとは思わなかったけどね。」

忍野の言葉に、志乃は驚きを隠せなかった。

「もし東城くんがやらなかったら、どうするつもりだったんですかっ？もっ・・・」

「東城くんには、『彼』と同じ『何か』を感じたからさ。ちょっと

賭けてみたくなっただけだよ。」

「え、それってお兄ちゃんの事ですか？」

「そうさ、君の大好きなお兄ちゃん……」

阿良々木暦と同じ、ね。

屋上で、たくさんの鳥たちに囲まれた1人の少女が、東城とすずみの様子を見ていた。

その少女の正体は、柚野花にこだった。

「東城くん……、私が必ず助けてあげるからね！」

そう言って、にこは鳥たちと共に、何処かへ消えていった。

花園鈴弥（後書き）

展開早くてすいません（泣）

まだまだ続きますので、よろしくお願いいたします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1436i/>

夢物語

2010年10月11日12時20分発行